

令和 7（2025）年度ムシガレイ日本海南西部系群の資源評価

水産研究・教育機構

水産資源研究所 水産資源研究センター（佐藤信彦・飯田真也・佐久間啓・
白川北斗・木下 董）

参画機関：鳥取県栽培漁業センター、島根県水産技術センター、山口県水産研究センター

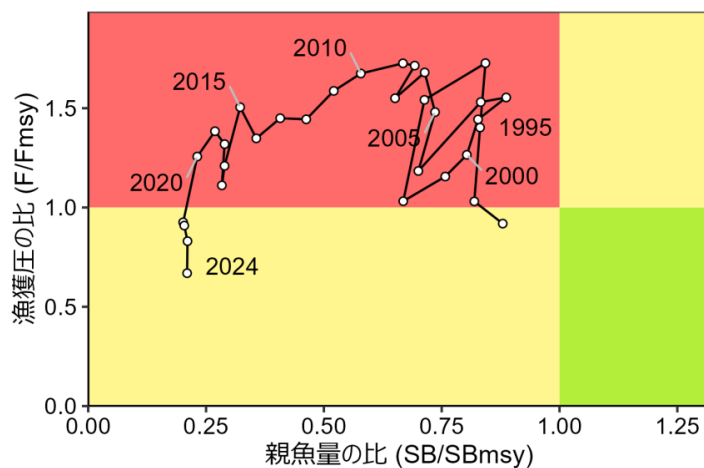
要 約

本系群の資源量について、2 そうびき沖合底びき網（浜田以西）の標準化 CPUE を考慮したコホート解析により推定した。本系群の漁獲量は、1970 年代末の約 5,000 トンをピークとし、その後増減を伴いながら 1990 年代後半には約 1,000 トンを下回るようになった。2010 年以降はさらに減少しており、2024 年の漁獲量は 224 トンであった。資源量は 2009 年までは 4,000～5,500 トンで推移していたが、その後減少し、2015 年には 2,000 トンを下回った。2016 年から 2018 年までは 1,600 トン付近で推移していたが、再び減少傾向となり、2024 年は 1,042 トンとなった。親魚量も資源量と概ね同様の推移を示しており、2024 年の親魚量は 840 トンと推定された。

令和 3 年 10 月に開催された「管理基準値等に関する研究機関会議」において、本系群の再生産関係にはホッケー・スティック型が適用されており、これに基づき推定された最大持続生産量（MSY）を実現できる水準の親魚量（SBmsy）は 40 百トンである。この基準に従うと、本系群の 2024 年の親魚量は SBmsy を大きく下回る（0.21 倍）。また、本系群に対する 2024 年の漁獲圧は Fmsy を下回る（0.67 倍）。親魚量の動向は直近 5 年間（2020～2024 年）の推移から「横ばい」と判断される。

本系群では、管理基準値や将来予測など、資源管理方針に関する検討会の議論をふまえて最終化される項目については管理基準値等に関する研究機関会議において提案された値を暫定的に示した。

要 約 図 表



最大持続生産量（MSY）、親魚量の水準と動向、および ABC	
MSY を実現する水準の親魚量（SBmsy）	40 百トン
2024 年の親魚量の水準	MSY を実現する水準を下回る（SBmsy の 0.21 倍）
2024 年の漁獲圧の水準	SBmsy を維持する水準を下回る（Fmsy の 0.67 倍）
2024 年の親魚量の動向	横ばい
MSY	15 百トン
2026 年の ABC	-
コメント： <ul style="list-style-type: none"> ・ ABC は、本系群の漁獲管理規則が「資源管理方針に関する検討会」で取り纏められ、「水産政策審議会」を経て定められた後に算定される。 ・ 近年の漁獲圧は低く、親魚量は横ばいを示している。 	

直近 5 年と将来 2 年の資源量、親魚量、漁獲量、F/Fmsy、および漁獲割合					
年	資源量 (百トン)	親魚量 (百トン)	漁獲量 (百トン)	F/Fmsy	漁獲割合 (%)
2020	13	9	4	1.26	34
2021	11	8	3	0.93	27
2022	11	8	3	0.91	26
2023	11	8	3	0.83	25
2024	10	8	2	0.67	22
2025	10	8	2	0.79	25
2026	9	7	—	—	—

・ 2025、2026 年の値は将来予測に基づく平均値である。

English title (authors)

Stock assessment and evaluation for shotted halibut of southwestern Sea of Japan stock (fiscal year 2025).

(Nobuhiko Sato, Masaya Iida, Kay Sakuma, Hokuto Shirakawa, Sumire Kinoshita)

1. データセット

本件資源評価に使用したデータセットは以下のとおり。

データセット	基礎情報、関係調査等
漁獲量 年齢別・年別漁獲尾数	沖合底びき網漁業漁獲成績報告書（水産庁） 主要港水揚げ量（山口県、島根県、鳥取県） 市場測定（島根県）
漁獲努力量、資源量指数	沖合底びき網漁業漁獲成績報告書（水産庁）*
自然死亡係数（M）	年当たり $M = 0.35$ を仮定（田中 1960）

*はコホート解析（Virtual Population Analysis, VPA）におけるチューニング指数である。

2. 生態

(1) 分布・回遊

ムシガレイは日本近海の大陸棚暖水域に分布する。日本海側では青森県～対馬までの広範囲に分布するが、山口県および島根県沖の日本海南西海域（東経 135°以西）が主分布域である（図 2-1、今岡・三栖 1969）。本種は韓国でも漁獲されているが詳細が不明であるため、本評価では日本海南西海域において日本漁船によって漁獲される群を評価対象として取り扱っている。対馬以東では、秋に対馬北東から見島北西の海域に分布が集中するが、他の時期には分散し、対馬以西では、春～夏に対馬西海域に滞留して秋には南西へ回遊、越冬する（三栖ほか 1973）。幼魚は浅海に生息し、成長にともない沖合へ移動する（今岡 1977）。

(2) 年齢・成長

全長は雌雄それぞれ 1 歳で 10.9 cm、11.4 cm、2 歳で 16.5 cm、17.2 cm、3 歳で 21.2 cm、21.4 cm、4 歳で 25.2 cm、24.5 cm となる。5 歳以降は雌雄差が大きくなり、5 歳で雌雄それぞれ 28.6 cm、26.9 cm、6 歳で 31.6 cm、28.6 cm、7 歳で 34.1 cm、29.8 cm となる（図 2-2、今井・宮崎 2005）。寿命は 7 歳程度と推察される。

(3) 成熟・産卵

成熟開始年齢は雄 2 歳、雌 3 歳である。産卵盛期は、対馬以西では 1 月下旬～2 月下旬、対馬以東では 2 月上旬～3 月上旬である（今岡 1971）。親魚量の計算では、2 歳の成熟割合を 0.4、3 歳以上の成熟率を 1 とした。

(4) 被捕食関係

全長約 12 cm までは小型甲殻類を主要な餌とし、約 12 cm 以上ではエビ・カニ類、イカ類などを捕食する。さらに全長約 18 cm から魚類を捕食する（今岡 1972）。島根県の漁獲物を対象とした精密測定・胃内容物観察では、エンコウガニ類、エビジャコ類が高い頻度で出現している（島根県水産技術センター 未発表）。被食については不明である。

3. 漁業の状況

(1) 漁業の概要

日本海南西海域におけるムシガレイの漁獲の殆どは底びき網（1 そうびきおよび2 そうびき沖合底びき網（以下、「沖底」とする）と小型底びき網（以下、「小底」とする））によるものであり、漁場は対馬南西海域から隠岐諸島周辺に及ぶ。底びき網以外では、刺し網、釣りおよびはえ縄等でも漁獲される。底びき網では浜田漁港と下関港を根拠地とする2 そうびき沖底（浜田以西）の漁獲が多く、漁業種類別統計が整備された1986年以降では、総漁獲量の47～78%を占める（図3-1、表3-1）。

(2) 漁獲量の推移

2 そうびき沖底（浜田以西）の漁獲量は、1970年代末の約5,000トン进行ピークとし、1980年代の前半に約2,500トン、後半には約1,000トンにまで減少した。2009年以降、さらに減少しており、2024年の漁獲量は133トンであった（図3-1、表3-1）。小底の漁獲量は、1986年以降2004年（197トン）を除き300～600トンで推移していたが、2011年からは減少傾向にあり、2024年は66トンであった（ただし、2024年は大型クラゲの発生による小底の操業控えの影響が少なからずある）。2024年の系群全体の漁獲量は、前年を約51トン下回る224トンであった。2024年の系群漁獲量に占める2 そうびき沖底（浜田以西）、1 そう、2 そうびき沖底（島根東部）、小底の割合はそれぞれ59%、11%、30%であり、近年は小底の割合が増加傾向にある（図3-2）。

1993年から2024年までの年別年齢別漁獲尾数の推移を図3-3に、年別年齢別漁獲量の推移を図3-4にそれぞれ示した。1993～2024年の漁獲尾数の変動には、3回のピークがみられる（図3-3、補足表2-1）。近年では、2009年以降、減少傾向にあり、2024年の漁獲尾数は過去最少の187万尾であった。年齢別では例年、1、2歳魚が漁獲物の主体となっているが、全漁獲尾数に占めるそれら合計の割合は2007年の80%から2021年の49%に低下し、2024年では42%であった。若齢魚の漁獲尾数が少ない状況が続いており、漁獲量に占める3歳魚と4歳魚の重量割合は2008年以降、漸増傾向にある（図3-4、補足表2-1）。

(3) 漁獲努力量

2 そうびき沖底（浜田以西）の有効漁獲努力量（補足資料8）は、1970年代後半の約80,000網をピークに減少傾向が続き、2010年には21,102網となった（図3-5、表3-2）。その後は20,000網前後で安定していたが、2014年以降再び減少し続けており、2024年は9,940網であった。

4. 資源の状態

(1) 資源評価の方法

日本海南西海域で操業する1 そうびきおよび2 そうびき沖底と、山口県、島根県、鳥取県の小底について、1966年以降の漁獲情報を収集した。統計資料が整備されている2 そうびき沖底（浜田以西）について、日別・漁船別の漁業データが詳細に整理されている1993年以降について標準化CPUEの計算（補足資料9）を行い、資源量指標値とした。

昨年度までは浜田港に水揚げされる 2 そうびき沖底の情報をもとに漁獲量全体について 1993 年以降の年齢別漁獲尾数を求めていたが、今年度からは系群漁獲量に占める割合が増加傾向にある小底漁獲を考慮するために島根県大田市場の漁獲情報を加えて、沖底と小底それぞれの年齢別漁獲尾数を求め、統計資料が整備されている 2 そうびき沖底の標準化 CPUE を指標値として用いたチューニング VPA により年齢別資源尾数を推定した（補足資料 1、2）。

(2) 資源量指標値の推移

2 そうびき沖底の標準化 CPUE (kg/網) は、1998 年の 9.2 から 2008 年の 29.0 にかけて増加した（図 4-1、表 3-2）。2009 年以降は減少に転じ、2018 年には 10.9 まで減少した。その後、2020 年にかけて微増した後、再び減少に転じて 2024 年は過去最低の 6.7 となった。

長期的な資源量指標値の推移として、1966 年以降の 2 そうびき沖底の資源量指数の推移を図 4-2 に示す。資源量指数は、1960 年代後半～1970 年代には 50,000 を超えた年もみられたが、1980 年代に減少し、1990 年以降は 9,000～25,000 で推移した（図 4-2、表 3-2）。2011～2015 年は 16,000 前後で推移していたが、2016 年以降さらに減少し、2024 年は 5,474 であった。

(3) 資源量と漁獲量の推移

VPA により推定された年齢別資源量を図 4-3、表 4-1 および補足表 2-1 に示す。資源量は 2001 年に 5,463 トンでピークとなり、2004 年にかけて減少した後、2008 年まで約 4,500 トンで横ばいであった。その後、2010 年には 3,000 トン台、2012 年には 2,000 トン台、2015 年には 1,000 トン台と大きく減少し、2024 年は 1,042 トンと推定された。

1 歳魚の資源尾数を加入量とし、その経年変化を親魚量とともに図 4-4 および表 4-1 に示す。加入量は 2008 年までは 30 百万尾以上で変動していたが、2009 年（2008 年級）以降は 30 百万尾を下回り、そのまま減少傾向は続き 2024 年（2023 年級）の加入量は 3.7 百万尾と過去最も低い値で推定された。

親魚量は、2003 年までは 3,000 トン前後で比較的安定していたが、2009 年（2,774 トン）以降は減少傾向を示し、2020 年には 1,000 トンを下回り 2024 年の親魚量は 840 トンと推定された。

VPA に使用した自然死亡係数 (M) の値が資源計算に与える影響をみるために、M を変化させた場合の 2024 年の資源量、親魚量、加入量を図 4-5 に示す。M を基準値である 0.35 から 0.1 増減させたときに生じる資源量、親魚量、加入量の増減はいずれも 30%以下であったが、加入量は M = 0.45 の値が M = 0.35 と比較して 28%の増加となり、加入量に与える M の不確実性の影響が他の推定値よりもやや大きい傾向が見られた。

年齢別漁獲係数 F の推移を図 4-6 および補足表 2-1 に示す。各年齢の F の単純平均は、長期的には概ね 0.3～0.6 で変動しているが、近年では 2009 年の 0.59 をピークとして、2017 年の 0.40 にかけて緩やかに低下した。その後、2019 年に 0.50 とやや上昇したが、その後は再び低下傾向にあり、2024 年の F は 0.24 であった。現状の漁獲圧は 2022 年から 2024 年の F の平均値 (0.29) とした。

漁獲割合は2009年の39%から2014年の34%に緩やかに低下した後、2015年の36%に一旦上昇した。その後、増減を繰り返し、近年では22~27%の間を推移している(図4-7、表4-1)。

(4) 加入量当たり漁獲量(YPR)、加入量当たり親魚量(SPR)および現状の漁獲圧

選択率の影響を考慮して漁獲圧を比較するため、加入量あたり親魚量(SPR)を基準に、その漁獲圧が無かった場合との比較を行った。図4-8に年ごとに漁獲が無かったと仮定した場合のSPRに対する、漁獲があった場合のSPRの割合(%SPR)の推移を示す。%SPRは漁獲圧が低いほど大きな値となる。%SPRは2008年の17%から2020年の26%まで概ね上昇傾向にあり、以降30%台で推移し2024年には42%となった。

現状の漁獲圧に対するYPRと%SPRの関係を図4-9に示す。ここで、Fの選択率としては令和3年10月に開催された「管理基準値等に関する研究機関会議」において最大持続生産量MSYを実現するF(Fmsy)の推定に用いた値(八木ほか2021b)を用いた。また、年齢別平均体重および成熟割合についてもFmsy算出時の値を使用した。Fmsyは%SPRに換算すると31%に相当する。Fmsyは現状の漁獲圧(F2022-2024)を下回っている。

(5) 再生産関係

親魚量(重量)と加入量(尾数)の関係(再生産関係)を図4-10に示す。上述の「管理基準値等に関する研究機関会議」において、本系群の再生産関係式にはホッカー・スティック型再生産関係が適用されている(八木ほか2021b)。ここで、再生産関係式のパラメータ推定に使用するデータは令和2(2020)年度の資源評価(八木ほか2021a)に基づく1993~2018年の親魚量と翌年(1994~2019年)の1歳魚時点の加入量とした。最適化方法には最小二乗法を用い、加入量の残差の自己相関を考慮した。再生産関係式の各パラメータを補足表6-1に示す。

(6) 現在の環境下においてMSYを実現する水準

現在の環境下において最大持続生産量MSYを実現する親魚量(SBmsy)およびMSYを実現する漁獲量として上記の「管理基準値等に関する研究機関会議」で推定された値(八木ほか2021b)を補足表6-2に示す。

(7) 資源の水準・動向および漁獲圧の水準

MSYを実現する親魚量と漁獲圧を基準にした神戸プロットを図4-11に示す。また、2024年の親魚量と漁獲圧の概要を補足表6-3に示した。本系群における2024年の親魚量はMSYを実現する親魚量(SBmsy)を下回っており、2024年の親魚量はSBmsyの0.21倍である。

また、2024年の漁獲圧は、MSYを実現する漁獲圧(Fmsy)を下回っており、MSYを実現する漁獲圧の0.67倍である。なお、神戸プロットに示した漁獲圧の比(F/Fmsy)とは、各年のFの選択率の下でFmsyの漁獲圧を与えるFを%SPR換算して求めた値と、各年のF値との比である。親魚量の動向は、直近5年間(2020~2024年)の推移から横ばいと判断される。

5. 資源評価のまとめ

親魚量は 2009 年から減少傾向にあったが、2021 年以降は横ばい傾向を示し、2024 年の親魚量は MSY を実現する親魚量 (SBmsy) を下回った。当系群に対する漁獲圧は 2020 年以降低下傾向にあり、2024 年は MSY を実現する漁獲圧 (Fmsy) を下回っている。資源量は減少傾向にあると判断される。

6. その他

本系群では例年、浜田港の水揚げ情報をもとに年齢別漁獲尾数を求め、浜田以西の 2 そうびき沖底の標準化 CPUE を指標値としたチューニング VPA で資源計算を行っていたが、レトロスペクティブバイアスによる資源量と親魚量の過大推定、漁獲係数の過小推定が指摘されていた。昨年度はレトロスペクティブバイアスに関する指摘を受けて、資源量指標値をチューニングに用いないノーマル VPA やリッジ VPA (Okamura et al. 2017) の適用を試みたが資源の実態にそぐわない可能性のある結果となった (佐藤ほか 2024)。その中で、レトロスペクティブバイアスの改善に資する一つの方法として、本年度は令和 6 年度日本海ブロック資源評価担当者会議で示した小底漁獲を考慮した年齢別漁獲尾数を資源評価に用いた。小底では沖底と比べて季節的に大きいサイズの漁獲割合が高くなる場合があり、沖底の情報のみを引き延ばして求めた年齢別漁獲尾数よりも 4+歳の割合が増える結果となった。小底の漁獲情報を考慮できるのは、情報が揃っている 2023 年 9 月以降となっているが、今後、小底を考慮した年齢別漁獲尾数が追加・更新されていくことでレトロスペクティブバイアスの改善が期待される。また、同じくレトロスペクティブバイアスの改善に向けて、Age-length key の見直しも検討中である。本系群の年齢別漁獲の計算に用いている Age-length key は 1990 年代の測定結果に基づく数値であり、特に大型個体の情報が不足していた。JV 機関の協力を得て、体サイズに幅を持たせた耳石サンプルの収集・蓄積および年齢査定を進めている。

7. 引用文献

- 今井千文・宮崎義信 (2005) 耳石解析によるムシガレイ日本海西部群の成長モデルの再検討. 水大研報, **53**, 21-34.
- 今岡要二郎 (1971) 日本海西南海域およびその周辺海域産ムシガレイの漁業生物学的研究 -II. 成熟と産卵について. 西水研報, **39**, 51-63.
- 今岡要二郎 (1972) 日本海西南海域およびその周辺海域産ムシガレイの漁業生物学的研究 -III. 食性について. 西水研報, **42**, 77-89.
- 今岡要二郎 (1977) 日本海西南海域およびその周辺海域産ムシガレイの漁業生物学的研究 (昭和 47 年度) ムシガレイ幼魚の生息域について. 島根水試事報, 昭和 47-48 年度, 297-299.
- 今岡要二郎・三栖 寛 (1969) 日本海西南海域およびその周辺海域産ムシガレイの漁業生物学的研究第 1 報. 年令と生長について. 西水研報, **37**, 51-70.

- 石川県水産総合センター・福井水産試験場・兵庫県但馬水産事務所・鳥取県水産試験場・島根県水産試験場 (1994) 平成3～5年度水産関係地域重要新技術開発促進事業総合報告書(重要カレイ類の生態と資源管理に関する研究), 118 pp.
- 三栖 寛・今岡要二郎・末島富治・花渕信夫・小嶋喜久雄・花渕靖子 (1973) 日本海西南海域およびその周辺海域産ムシガレイの漁業生物学的研究-IV. 標識放流結果からみた分布と回遊について. 西水研報, **43**, 23-36.
- 八木佑太・藤原邦浩・飯田真也・佐久間啓・吉川 茜・白川北斗 (2021a) 令和2(2020)年度ムシガレイ日本海南西部系群の資源評価. 水産研究・教育機構. 1-27. FRA-SA2020-RC05-6. https://abchan.fra.go.jp/wpt/wp-content/uploads/2020/details_2020_65.pdf
- 八木佑太・藤原邦浩・飯田真也・佐久間啓・吉川 茜・白川北斗 (2021b) 令和3(2021)年度ムシガレイ日本海南西部系群の管理基準値等に関する研究機関会議資料. 水産研究・教育機構. 1-22. FRA-SA2021-BRP12-2. http://www.fra.affrc.go.jp/shigen_hyoka/SCmeeting/2019-1/20211026/doc_mushigarei_japansea-sw_RIM.pdf
- Okamura, H., Y. Yamashita and M. Ichinokawa (2017) Ridge virtual population analysis to reduce the instability of fishing mortalities in the terminal year. ICES J. Mar. Sci., **74**, 2427-2436.
- 佐藤信彦・飯田真也・佐久間啓・白川北斗・木下 堇 (2024) 令和6(2024)年度ムシガレイ日本海南西部系群の資源評価. 水産研究・教育機構. 1-57. FRA-SA2024-SC03-09. https://abchan.fra.go.jp/wpt/wp-content/uploads/2025/03/details_2024_65.pdf

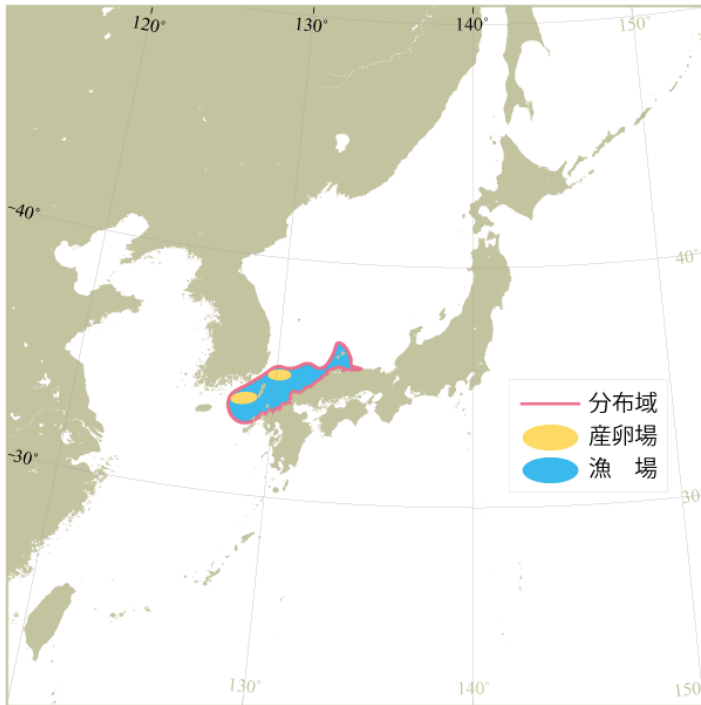


図 2-1. ムシガレイ日本海南西部系群の分布

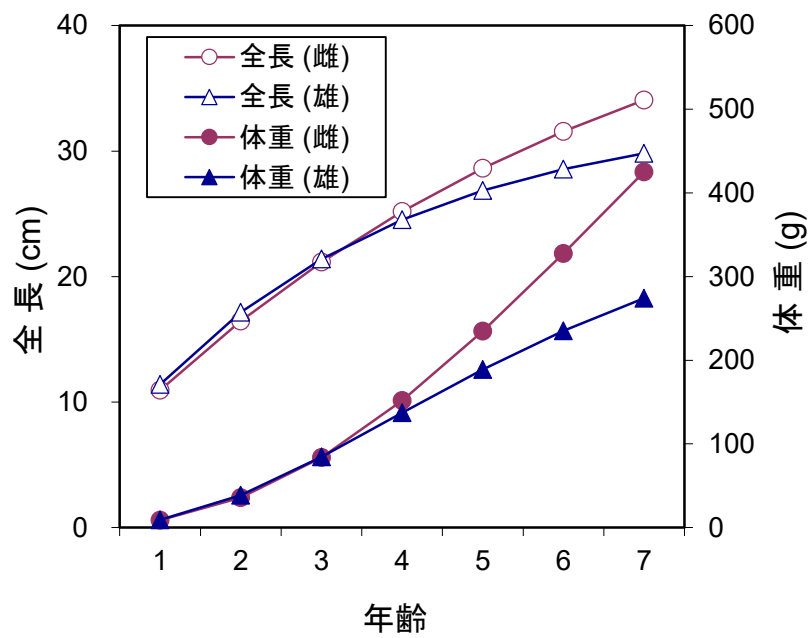


図 2-2. 年齢と成長

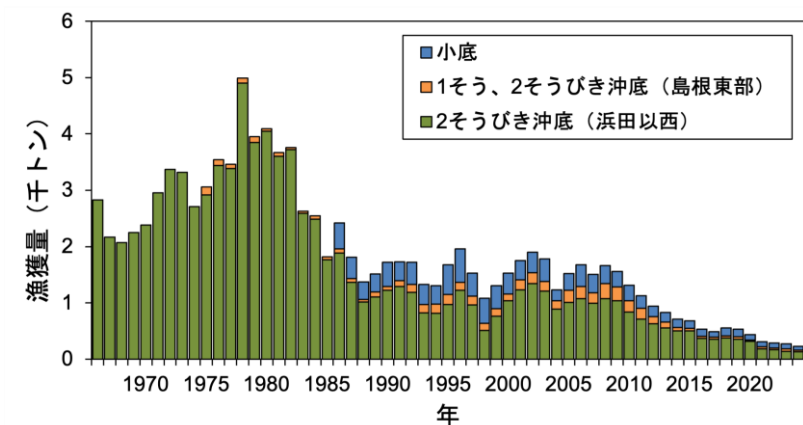


図 3-1. 漁業種類別漁獲量の推移 (1985 年以前の小底のデータは無い)

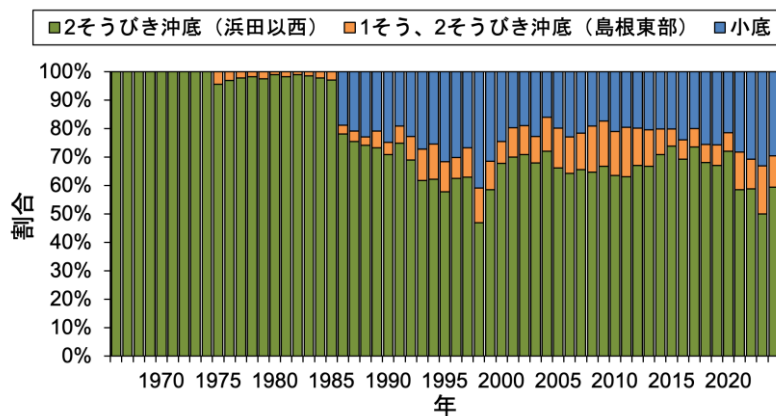


図 3-2. 漁業種類別漁獲割合の推移 (1985 年以前の小底のデータは無い)

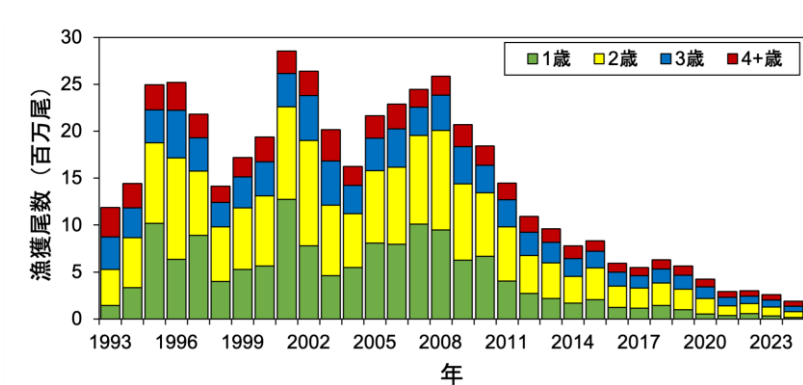


図 3-3. 年齢別漁獲尾数の推移

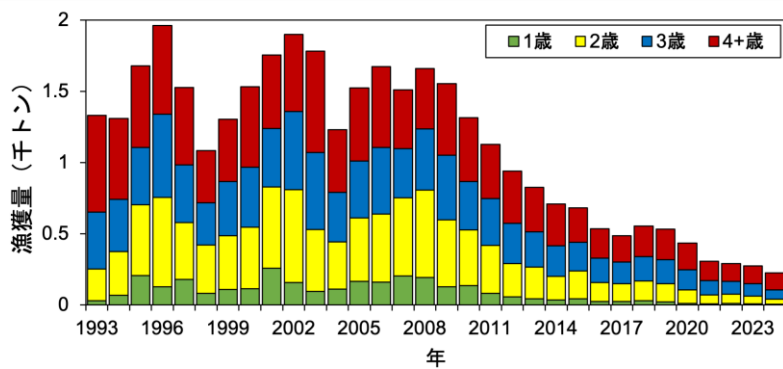


図 3-4. 年齢別漁獲量の推移

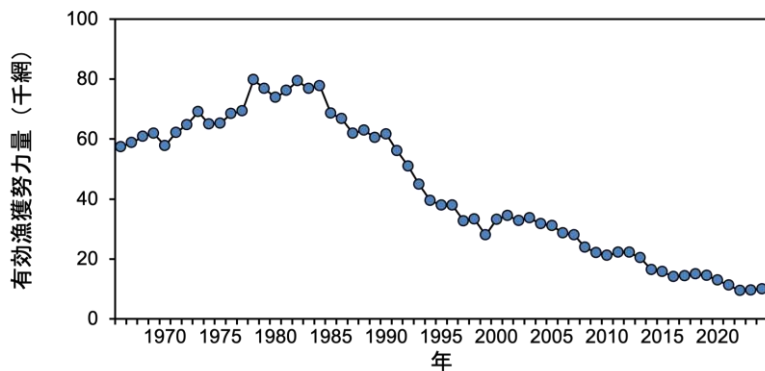


図 3-5. 有効漁獲努力量（2 そうびき沖底、浜田以西）の推移

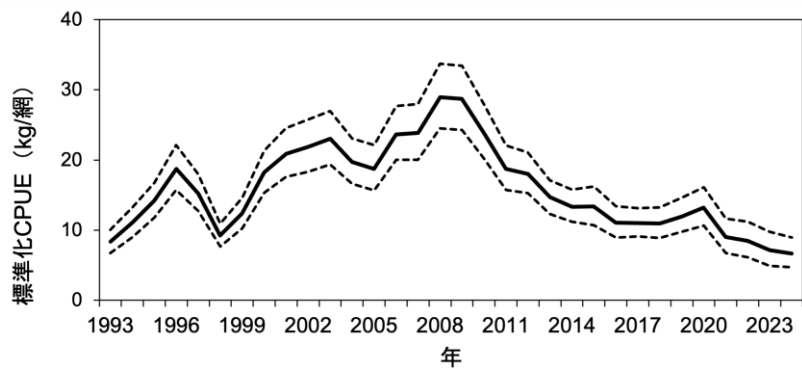


図 4-1. 標準化 CPUE（2 そうびき沖底、浜田以西）の推移 破線は 95%信頼区間。

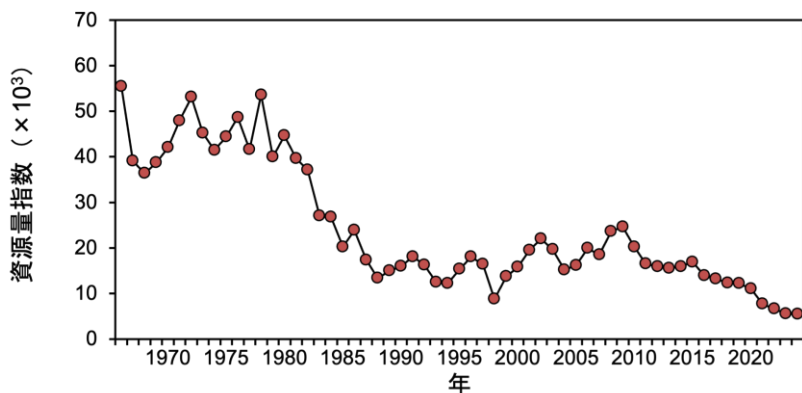


図 4-2. 資源量指数 (2 そうびき沖底、浜田以西) の推移

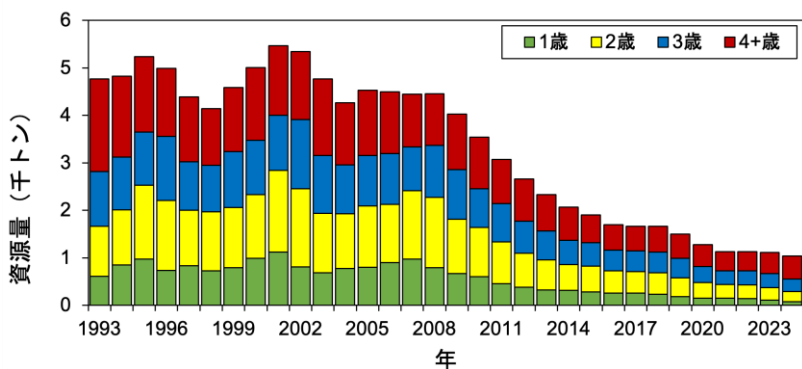


図 4-3. 年齢別資源量の推移

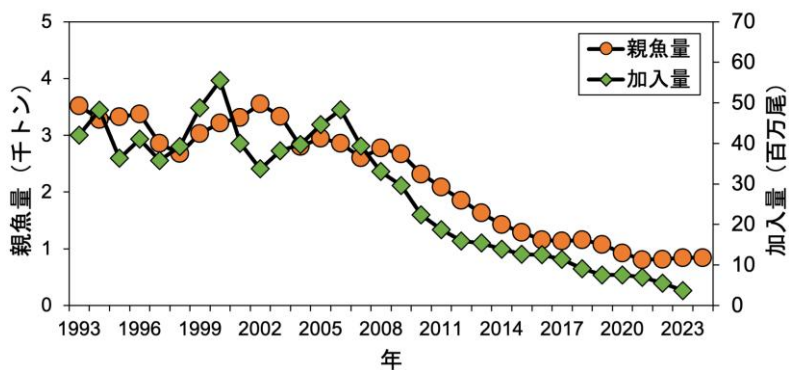


図 4-4. 親魚量および加入尾数 (1 歳魚) の推移 横軸は産卵年を示す。

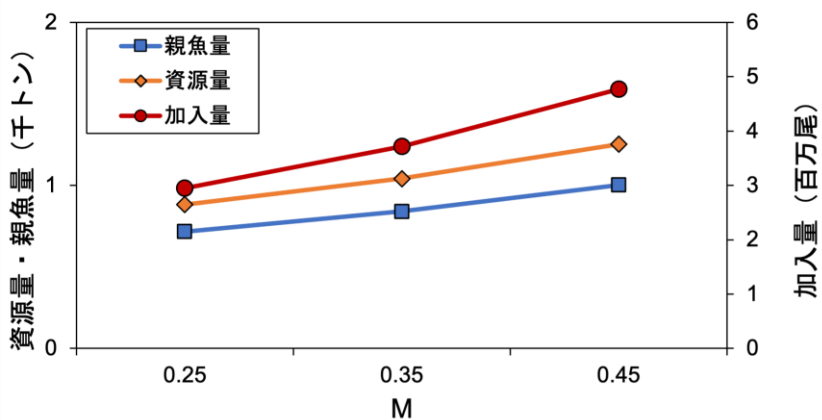


図 4-5. 自然死亡係数 (M) と 2024 年資源量、親魚量、加入量の関係

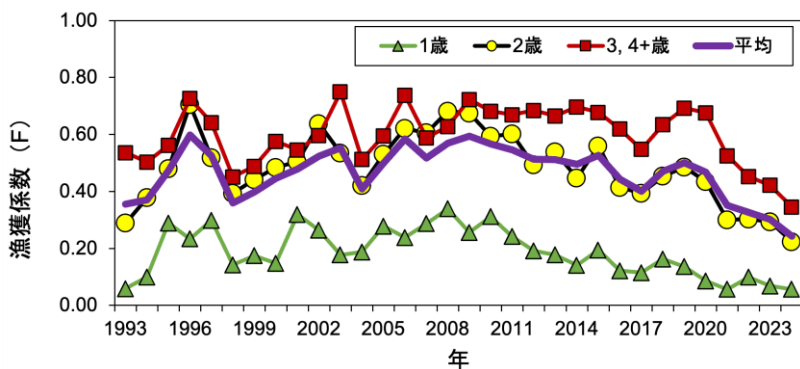


図 4-6. 年齢別漁獲係数 F の推移

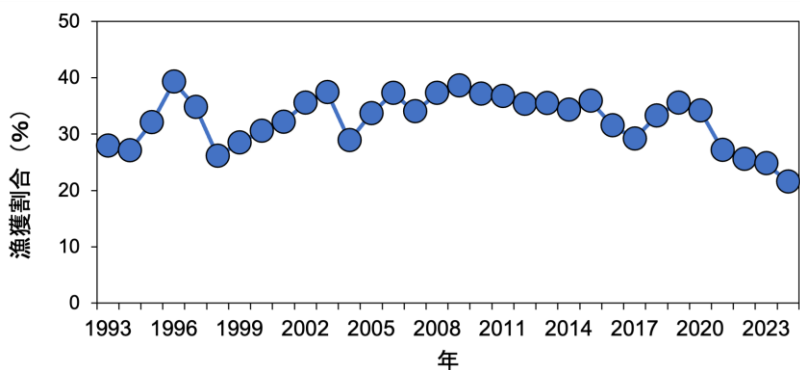


図 4-7. 漁獲割合の推移

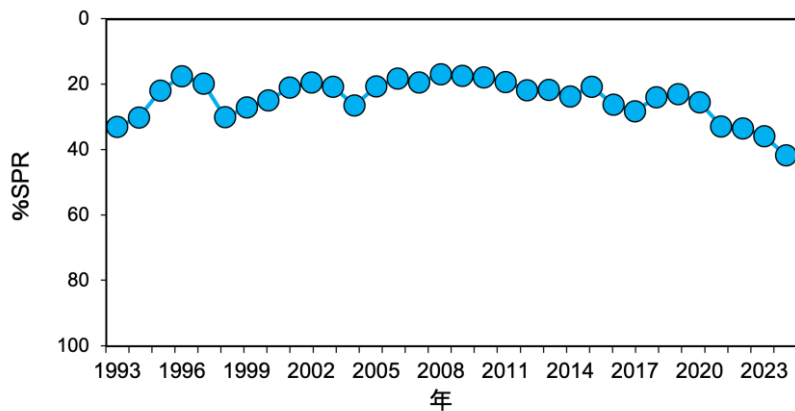


図 4-8. %SPR の推移 %SPR は漁獲がないときの親魚量に対する漁獲があるときの親魚量の割合を示し、F が高い（低い）と%SPR は小さく（大きく）なる。

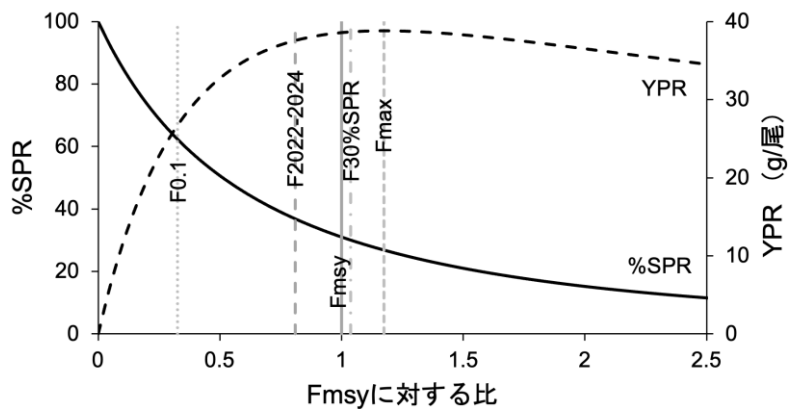


図 4-9. Fmsy に対する YPR、%SPR の関係

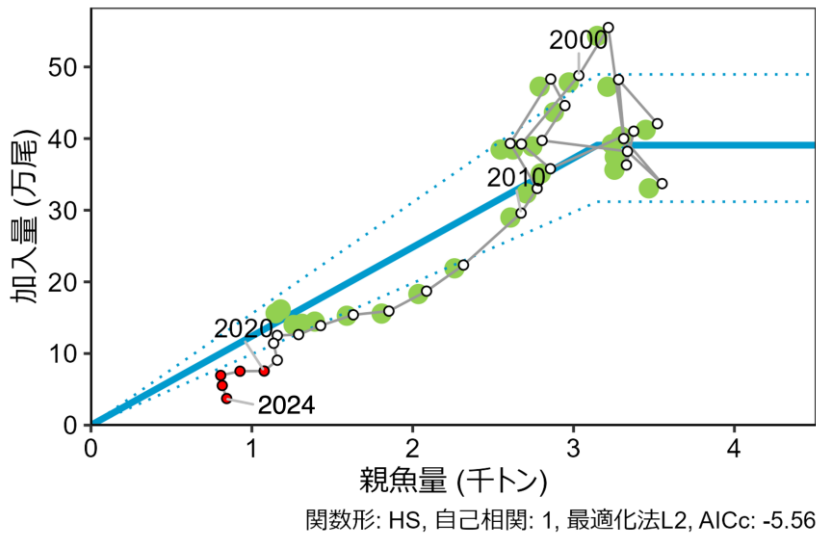


図 4-10. 親魚量と加入量の関係（再生産関係）

再生産関係には自己相関を考慮したホッカー・スティック（HS）型再生産関係式を用い、最小二乗法によりパラメータ推定を行った。緑色丸印は再生産関係の分析に使用した令和 2 年度評価時の 1993～2018 年の親魚量と翌年（1994～2019 年）の 1 歳魚時点の加入量を示す。図中の数字は加入した年を示す。図中の再生産関係式（青実線）の上下の点線は、仮定されている再生産関係において観察データの 90%が含まれると推定される範囲である。白抜丸印は本年度評価における 1993～2018 年の親魚量と加入量、赤色丸印は直近 5 年（2020～2024 年）の親魚量と加入量を示す。

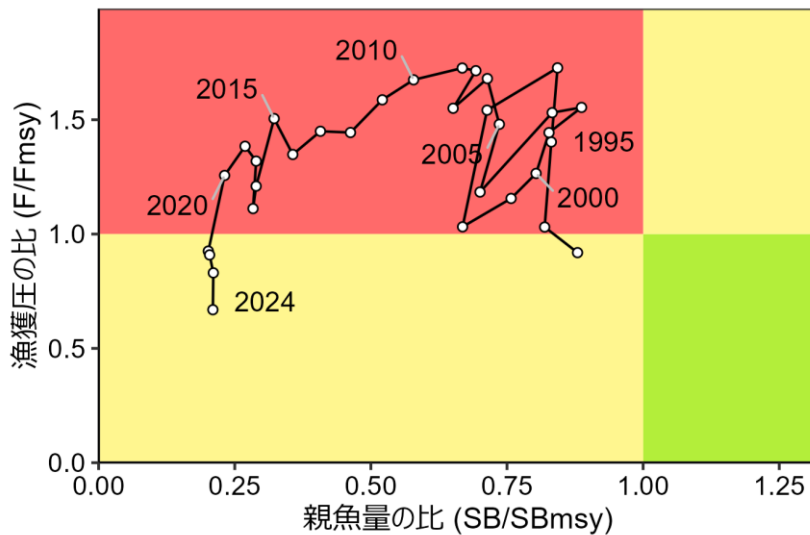


図 4-11. 最大持続生産量（MSY）を実現する親魚量（SBmsy）と SBmsy を維持する漁獲圧（Fmsy）に対する過去の親魚量および漁獲圧の関係（神戸プロット）

表 3-1. ムシガレイ日本海南西部系群における漁業種類別漁獲量 (トン)

年	2そうびき沖底		1そうびき沖底	小底	計
	浜田以西	島根東部	日本海西部		
1966	2,829				2,829
1967	2,169				2,169
1968	2,069				2,069
1969	2,247				2,247
1970	2,384				2,384
1971	2,954				2,954
1972	3,371				3,371
1973	3,322				3,322
1974	2,711				2,711
1975	2,920	137			3,057
1976	3,436	109			3,545
1977	3,384	75			3,460
1978	4,906	86			4,991
1979	3,848	100			3,948
1980	4,048	46			4,094
1981	3,604	64			3,668
1982	3,721	38	2		3,761
1983	2,588	27	11		2,625
1984	2,490	50	6		2,546
1985	1,764	49	4		1,817
1986	1,887	72	2	456	2,417
1987	1,364	61	4	379	1,808
1988	1,017	40	1	314	1,373
1989	1,107	89	1	317	1,514
1990	1,221	68	5	428	1,722
1991	1,292	101	3	331	1,726
1992	1,187	139	2	393	1,722
1993	821	141	6	362	1,330
1994	814	157	5	333	1,308
1995	970	175	2	531	1,678
1996	1,225	140	2	593	1,960
1997	960	126	31	408	1,526
1998	507	115	17	444	1,083
1999	763	110	22	411	1,305
2000	1,037	107	10	377	1,531
2001	1,228	161	18	347	1,754
2002	1,346	179	12	362	1,899
2003	1,210	151	16	406	1,783
2004	887	110	37	197	1,231
2005	1,007	199	15	303	1,524
2006	1,076	191	22	385	1,674
2007	990	164	29	326	1,509
2008	1,074	243	24	318	1,659
2009	1,037	236	11	270	1,554
2010	833	172	32	276	1,313
2011	710	174	22	220	1,126
2012	630	96	28	187	940
2013	551	68	37	169	826
2014	502	23	40	143	708
2015	502	8	34	137	681
2016	369	3	34	128	534
2017	356	2	30	97	485
2018	377	2	32	142	553
2019	357	1	38	137	532
2020	313	1	27	93	435
2021	179	0	41	86	306
2022	170	0	30	89	289
2023	137	0	47	91	275
2024*	133	0	25	66	224

*暫定値。

表 3-2. 2 そうびき沖底によるムシガレイの漁獲動向

年	漁獲量(トン)	有効漁獲努力量*1	有漁漁区数*1	資源量指数*1	標準化CPUE*2
1966	2,829	57,426	1,125	55,430	
1967	2,169	58,805	1,059	39,069	
1968	2,069	60,832	1,070	36,385	
1969	2,247	61,894	1,066	38,703	
1970	2,384	57,777	1,018	42,010	
1971	2,954	62,139	1,008	47,926	
1972	3,371	64,747	1,020	53,104	
1973	3,322	69,069	939	45,160	
1974	2,711	64,965	993	41,436	
1975	2,920	65,281	992	44,372	
1976	3,436	68,379	968	48,643	
1977	3,384	69,365	852	41,571	
1978	4,906	79,841	872	53,580	
1979	3,848	76,802	798	39,979	
1980	4,048	73,844	814	44,621	
1981	3,604	76,131	837	39,622	
1982	3,721	79,403	791	37,071	
1983	2,588	76,750	802	27,040	
1984	2,490	77,753	835	26,745	
1985	1,764	68,513	786	20,236	
1986	1,887	66,718	844	23,867	
1987	1,364	61,896	787	17,348	
1988	1,017	62,958	827	13,360	
1989	1,107	60,453	819	14,997	
1990	1,221	61,599	806	15,973	
1991	1,292	56,045	784	18,069	
1992	1,187	50,931	696	16,227	
1993	821	44,873	682	12,480	8.4
1994	814	39,444	589	12,151	11.1
1995	970	37,970	600	15,322	14.2
1996	1,225	37,928	558	18,019	18.8
1997	960	32,672	558	16,402	15.2
1998	507	33,267	577	8,793	9.2
1999	763	27,996	504	13,728	12.4
2000	1,037	33,189	506	15,806	18.2
2001	1,228	34,420	547	19,510	20.9
2002	1,346	32,815	536	21,985	21.9
2003	1,210	33,635	546	19,640	23.0
2004	887	31,692	543	15,194	19.7
2005	1,007	31,130	498	16,114	18.7
2006	1,076	28,621	530	19,926	23.7
2007	990	27,949	522	18,494	23.9
2008	1,074	23,852	524	23,593	29.0
2009	1,037	22,102	525	24,633	28.7
2010	833	21,102	511	20,182	23.8
2011	710	22,173	515	16,488	18.8
2012	630	22,204	559	15,849	18.0
2013	551	20,393	573	15,490	14.7
2014	502	16,373	519	15,921	13.3
2015	502	15,747	530	16,892	13.4
2016	369	14,021	528	13,904	11.1
2017	356	14,316	530	13,186	11.0
2018	377	14,968	490	12,325	10.9
2019	357	14,400	492	12,202	12.0
2020	313	12,878	492	10,988	13.2
2021	179	11,191	379	7,707	9.0
2022	170	9,466	370	6,632	8.5
2023	137	9,608	387	5,528	7.2
2024 ^{*3}	133	9,940	409	5,474	6.7

沖合底びき網統計による。

*1各項目については、補足資料8を参照。

*2補足資料9を参照。

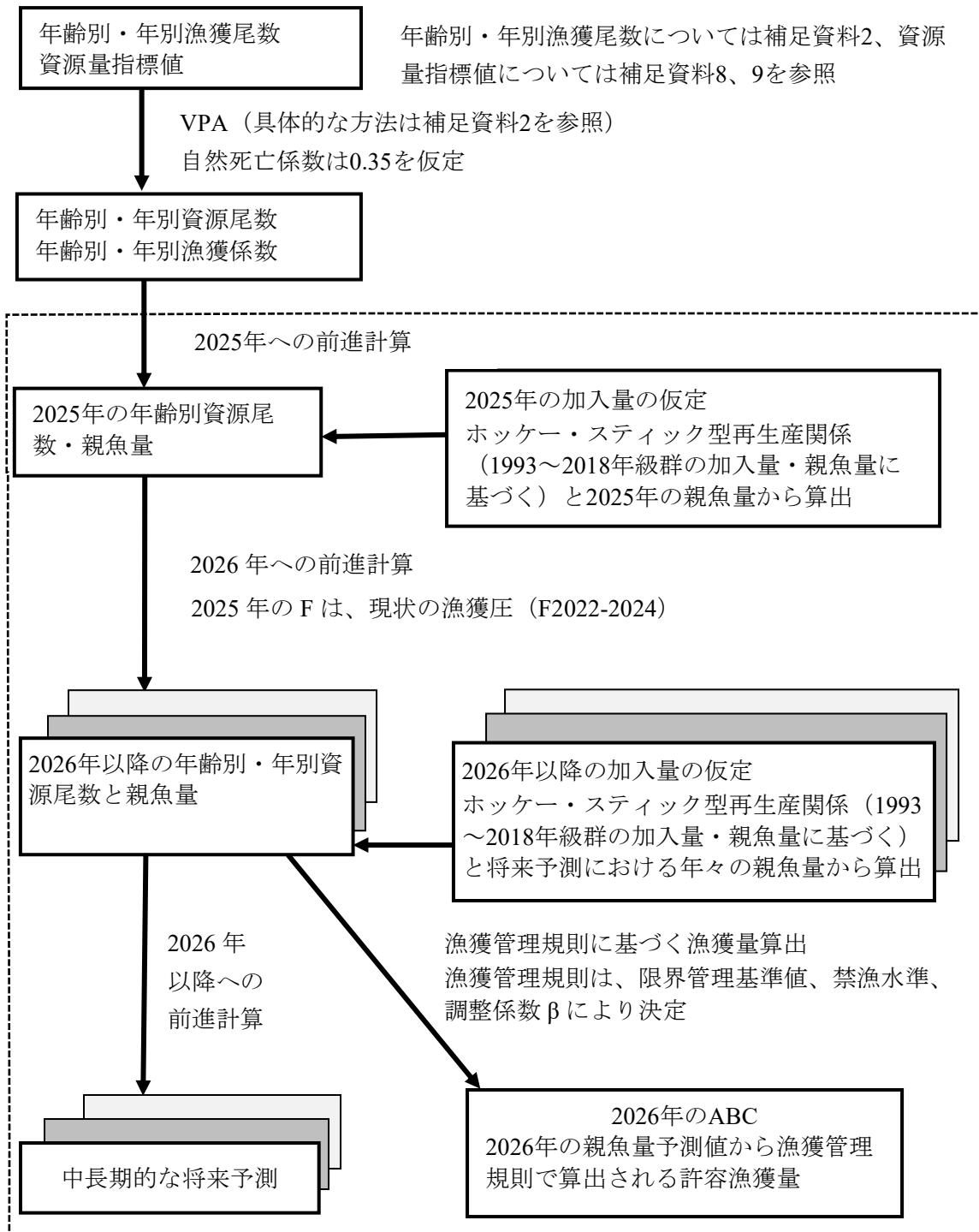
*3暫定値。

表 4-1. ムシガレイ日本海南西部系群の資源解析結果

年	漁獲量 (トン)	資源量 (トン)	親魚量 (トン)	加入尾数 (千尾)	漁獲割合 (%)	%SPR	F/Fmsy
1993	1,330	4,764	3,521	42,080	28	33	0.92
1994	1,308	4,827	3,280	48,237	27	30	1.03
1995	1,678	5,236	3,328	36,313	32	22	1.40
1996	1,960	4,992	3,374	41,028	39	18	1.73
1997	1,526	4,389	2,856	35,791	35	20	1.54
1998	1,083	4,144	2,676	39,238	26	30	1.03
1999	1,305	4,586	3,033	48,811	28	27	1.16
2000	1,531	5,009	3,216	55,502	31	25	1.27
2001	1,754	5,463	3,312	39,992	32	21	1.44
2002	1,899	5,346	3,551	33,713	36	19	1.55
2003	1,783	4,768	3,335	38,215	37	21	1.53
2004	1,231	4,268	2,804	39,733	29	26	1.18
2005	1,524	4,525	2,946	44,608	34	21	1.48
2006	1,674	4,496	2,858	48,308	37	18	1.68
2007	1,509	4,443	2,606	39,321	34	19	1.55
2008	1,659	4,456	2,774	33,036	37	17	1.71
2009	1,554	4,027	2,674	29,604	39	18	1.73
2010	1,313	3,540	2,316	22,349	37	18	1.67
2011	1,126	3,068	2,086	18,707	37	19	1.59
2012	940	2,659	1,852	15,920	35	22	1.44
2013	826	2,331	1,631	15,401	35	22	1.45
2014	708	2,065	1,428	13,895	34	24	1.35
2015	681	1,899	1,290	12,641	36	21	1.51
2016	534	1,693	1,158	12,520	32	26	1.21
2017	485	1,662	1,135	11,431	29	28	1.11
2018	553	1,663	1,158	9,063	33	24	1.32
2019	532	1,498	1,077	7,557	36	23	1.38
2020	435	1,273	926	7,530	34	26	1.26
2021	306	1,128	806	6,944	27	33	0.93
2022	289	1,130	816	5,536	26	34	0.91
2023	275	1,109	843	3,718	25	36	0.83
2024	224	1,042	840	—	22	42	0.67

加入尾数: 対象年に発生し、1歳時における尾数。

補足資料 1 資源評価の流れ



※ 点線枠内は資源管理方針に関する検討会における管理基準値や漁獲管理規則等の議論をふまえて作成される。

補足資料 2 計算方法

(1) 年齢別漁獲尾数

1993～2024年に島根県浜田漁港において2そうびき沖底により水揚げされたムシガレイの年齢別漁獲尾数および2023～2024年（2023年のみ9～12月）に島根県大田市場において小底により水揚げされたムシガレイの年齢別漁獲尾数をベースに、評価対象資源全体の年齢別漁獲尾数を求めた。

1. 浜田漁港の全長組成

島根県浜田漁港における2そうびき沖底の水揚げ物には、サイズ依存性のある入り数銘柄、散銘柄および他の銘柄がある。入り数銘柄について、2002年3月～2023年12月の市場調査データを基に、雌雄込みの銘柄別全長組成（箱内尾数）変換表を作成した。散銘柄については、2002年3月～2016年5月、2016年9月～2024年12月の市場調査データに基づきそれぞれ雌雄込みの銘柄別全長組成（箱内尾数）変換表を作成した。1993～2023年の各月において、島根県浜田漁港に2そうびき沖底により水揚げされたムシガレイの全長組成（漁獲尾数）を算出した。

2. 大田市場の全長組成

浜田漁港と同様に島根県大田市場における小底の水揚げ物には、サイズ依存性のある入り数銘柄、散銘柄および他の銘柄がある。入り数銘柄について、2023年9月～2024年12月の市場調査データを基に、雌雄込みの銘柄別全長組成（箱内尾数）変換表を作成した。散銘柄についても、2023年9月～2024年12月の市場調査データに基づきそれぞれ雌雄込みの銘柄別全長組成（箱内尾数）変換表を作成した。2023年9月～2024年12月の各月において、島根県大田市場に小底により水揚げされたムシガレイの全長組成（漁獲尾数）を算出した。

3. 年齢分解

1989～2003年に日本海南西海域における試験操業による採集物ならびに市場で購入した水揚げ物のムシガレイ1,708個体の耳石標本（山口県水産研究センター、島根県水産試験場（現・島根県水産技術センター）および西海区水産研究所（現・水産機構長崎庁舎）保有）の年齢査定結果に基づく、3～5月、6～8月、9～11月、および12月～翌年2月における年齢体長相関表（上田 2006）を用い、浜田漁港における2そうびき沖底により入り数・散銘柄として水揚げされたムシガレイの各月の年齢別漁獲尾数を算出した。なお、用いた年齢体長相関表では、年齢起算日を3月1日としているため、1月と2月の各年齢群は+1歳群として扱った。

3. 全体への引き延ばし

入り数・散銘柄として水揚げされたムシガレイの各月の年齢別漁獲尾数を、浜田2そうびき沖底全体および島根県小底の年齢別漁獲尾数に各月で引き延ばした。さらに、各月の年齢別漁獲尾数を3～5月、6～8月、9～11月、12月および1～2月の期間で合算し、各期

間における本系群の総漁獲量を用いて、本系群全体の年齢別漁獲尾数に引き延ばした。これらの総和を、各年（暦年）における評価対象の年齢別漁獲尾数とし VPA に用いた。

(2) 資源計算方法 (VPA)

0 歳魚は漁獲されないため、1 歳魚以上の漁獲対象資源について、最高年齢群は 4 歳以上とした（以下、4+と表す）。用いた各年齢の体重と成熟率は下表に示す。1993～2024 年の 4+の体重は、各年の 4 歳と 5 歳以上の割合で重み付けした平均値を用いた。自然死亡係数 M は、田内・田中の式（田中 1960）により、寿命を 7 歳として求めた ($M=2.5 \div 7 \text{ 歳} \approx 0.35$)。

年齢	1	2	3	4	5+
体重 (g)	20	58	115	188	331
成熟率 (%)	0	40	100	100	100

年齢別資源尾数の推定には Pope の式を用い、最高年齢 4+と 3 歳の各年の漁獲係数 F は等しいとした。

1～2 歳の資源尾数は以下の式(1)より計算した。

$$N_{a,y} = N_{a+1,y+1} \exp(M) + C_{a,y} \exp\left(\frac{M}{2}\right) \quad \dots \quad (1)$$

ここで、N は資源尾数、C は漁獲尾数、a は年齢、y は年。3 歳魚は(2)式、4+は(3)式により計算した。

$$N_{3,y} = \frac{C_{3,y}}{C_{4+,y} + C_{3,y}} N_{4+,y+1} \exp(M) + C_{3,y} \exp\left(\frac{M}{2}\right) \quad \dots \quad (2)$$

$$N_{4+,y} = \frac{C_{4+,y}}{C_{3,y}} N_{3,y} = \frac{C_{4+,y}}{C_{4+,y} + C_{3,y}} N_{4+,y+1} \exp(M) + C_{4+,y} \exp\left(\frac{M}{2}\right) \quad \dots \quad (3)$$

最近年については全年齢の資源尾数を(4)式により、漁獲係数を(5)式により計算した。

$$N_{a,y} = \frac{C_{a,y}}{1 - \exp(-F_{a,y})} \exp\left(\frac{M}{2}\right) \quad \dots \quad (4)$$

2008 年から 2024 年までの標準化 CPUE を用いて、式 (5) が最小となるように最近年の 3 歳と 4+歳の F 値 を求めた。1 歳と 2 歳の F 値は、2024 年の年齢別選択率を過去 3 年平均 (2021～2023 年) として計算した。

$$\sum_{y=2008}^{2024} \{\ln(q \cdot B_y) - \ln(CPUE_y)\}^2 \quad \dots \quad (5)$$

$$q = \left(\frac{\prod_{y=2008}^{2024} CPUE_y}{\prod_{y=2008}^{2024} B_y} \right)^{\frac{1}{17}} \dots \dots \dots (6)$$

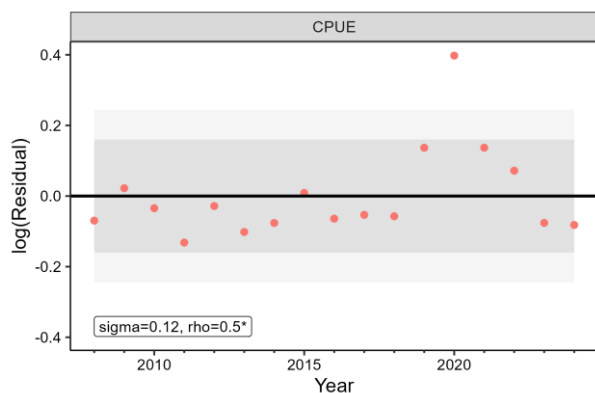
ここで、 q はチューニングパラメータ、 B は資源量、 $CPUE$ は標準化 $CPUE$ 。

(3) モデル診断結果

「令和 7 (2025) 年度 資源評価におけるモデル診断の手順と診断結果の提供指針. FRA-SA2025-ABCWG02-03」(水産研究・教育機構 2025) に従い、本系群の評価に用いた VPA の統計学的妥当性や仮定に対する頑健性について診断した。指標値と予測値との関係は 2018 年以前は 2009 年と 2015 年を除いて負の残差、2019 年から 2022 年は正の残差、以降 2023 年と 2024 年は負の残差となり、2020 年前後は $CPUE$ を低く予測する傾向があった(補足図 2-1、補足図 2-2)。残差の自己相関が生じている点は今後改善を図る必要があるが、指標値のバイアスだけで生じる問題でないためすぐに解決出来ないことが多い(水産研究・教育機構 2025)。また、指標値と予測値との関係は線形を仮定して問題ないと考えられた(補足図 2-3)。レトロスペクティブ解析では、データの追加・更新が行われることで、特に資源量と親魚量をやや過大に推定する傾向が認められた(補足図 2-4)。

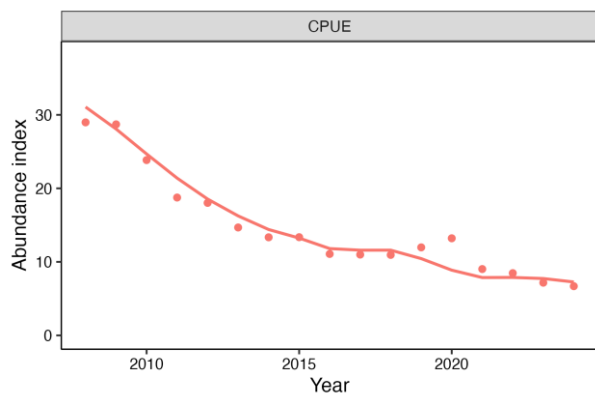
引用文献

- 水産研究・教育機構 (2025) 令和 7 (2025) 年 資源評価におけるモデル診断の手順と診断結果の提供指針. FRA-SA2025-ABCWG02-03, 水産研究・教育機構, 横浜, 24 pp. https://abchan.fra.go.jp/references_list/FRA-SA2025-ABCWG02-03.pdf
- 田中昌一 (1960) 水産生物の Population Dynamics と漁業資源管理. 東海水研報, **28**, 1-200.
- 上田幸男 (2006) 平成 17 年ムシガレイ日本海系群の資源評価. 平成 17 年度我が国周辺水域の漁業資源評価 第 3 分冊, 水産庁・水産総合研究センター, 1232-1249.
- 平松一彦 (2001) VPA (Virtual Population Analysis). 平成 12 年度資源評価体制確立推進事業報告書—資源解析手法教科書—, 日本水産資源保護協会, 104-128.

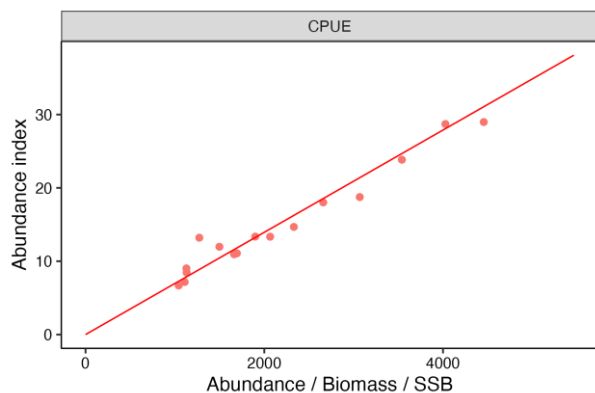


補足図 2-1. 残差プロットの時系列プロット

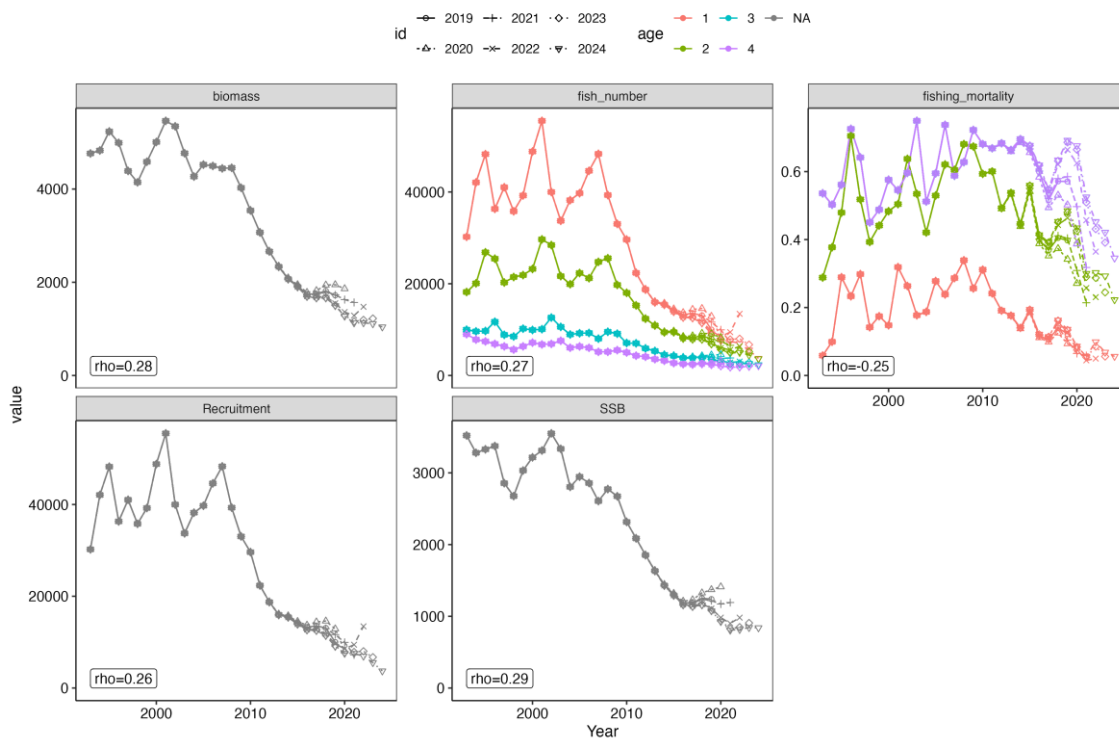
σ は観測誤差、 ρ は残差の自己相関係数、薄い灰色は 1.96σ 区間 (95%区間)、濃い灰色は 1.28σ 区間 (80%区間) を示す。*は自己相関が有意であることを示す。



補足図 2-2. 予測値 (折線) と指標値 (点) の時系列プロット



補足図 2-3. 予測値と指標値の関係



補足図 2-4. 資源量 (biomass)、資源尾数 (fish_number)、漁獲係数 (fishing_mortality)、1 歳資源尾数 (Recruitment)、親魚量 (SSB) のレトロスペクティブ解析結果

補足表 2-1. 資源解析結果

年齢別漁獲尾数(千尾)											
年	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003
1歳	1,446	3,341	10,169	6,339	8,882	3,974	5,272	5,632	12,723	7,773	4,596
2歳	3,825	5,300	8,583	10,811	6,881	5,853	6,555	7,474	9,864	11,250	7,528
3歳	3,476	3,188	3,501	5,074	3,523	2,590	3,309	3,646	3,561	4,762	4,689
4歳以上	3,137	2,596	2,682	2,983	2,522	1,718	2,060	2,633	2,388	2,597	3,353
計	11,884	14,424	24,935	25,208	21,808	14,135	17,195	19,384	28,536	26,382	20,165
年齢別漁獲量(トン)											
年	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003
1歳	29	67	205	128	179	80	106	114	257	157	93
2歳	221	307	497	626	398	339	380	433	571	651	436
3歳	400	367	403	585	406	298	381	420	410	549	540
4歳以上	679	566	573	622	543	365	438	564	516	542	714
計	1,331	1,308	1,679	1,960	1,527	1,083	1,305	1,531	1,754	1,899	1,783
年齢別漁獲係数											
年	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003
1歳	0.06	0.10	0.29	0.23	0.30	0.14	0.17	0.15	0.32	0.26	0.18
2歳	0.29	0.38	0.48	0.71	0.52	0.39	0.44	0.48	0.50	0.64	0.53
3歳	0.54	0.50	0.56	0.73	0.64	0.45	0.49	0.58	0.55	0.60	0.75
4歳以上	0.54	0.50	0.56	0.73	0.64	0.45	0.49	0.58	0.55	0.60	0.75
単純平均	0.35	0.37	0.47	0.60	0.52	0.36	0.40	0.45	0.48	0.52	0.55
年齢別資源尾数(千尾)											
年	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003
1歳	30,224	42,080	48,237	36,313	41,028	35,791	39,238	48,811	55,502	39,992	33,713
2歳	18,196	20,085	26,848	25,456	20,267	21,456	21,885	23,225	29,668	28,431	21,657
3歳	9,980	9,612	9,705	11,715	8,863	8,506	10,206	9,919	10,093	12,627	10,591
4歳以上	9,005	7,827	7,434	6,887	6,344	5,642	6,353	7,163	6,767	6,887	7,574
計	67,405	79,603	92,224	80,370	76,503	71,394	77,683	89,118	102,031	87,938	73,535
年齢別資源量(トン)											
年	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003
1歳	611	850	974	734	829	723	793	986	1,121	808	681
2歳	1,054	1,163	1,555	1,474	1,173	1,242	1,267	1,345	1,718	1,646	1,254
3歳	1,150	1,107	1,118	1,350	1,021	980	1,176	1,143	1,163	1,455	1,220
4歳以上	1,950	1,707	1,589	1,435	1,366	1,199	1,350	1,536	1,462	1,438	1,613
計	4,764	4,827	5,236	4,992	4,389	4,144	4,586	5,009	5,463	5,346	4,768
年齢別親魚量(トン)											
年	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003
1歳	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
2歳	421	465	622	590	469	497	507	538	687	658	502
3歳	1,150	1,107	1,118	1,350	1,021	980	1,176	1,143	1,163	1,455	1,220
4歳以上	1,950	1,707	1,589	1,435	1,366	1,199	1,350	1,536	1,462	1,438	1,613
計	3,521	3,280	3,328	3,374	2,856	2,676	3,033	3,216	3,312	3,551	3,335

補足表 2-1. (続き)

年齢別漁獲尾数(千尾)											
年	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014
1歳	5,477	8,095	7,945	10,108	9,494	6,268	6,654	4,029	2,732	2,167	1,699
2歳	5,739	7,708	8,235	9,438	10,597	8,126	6,771	5,793	4,039	3,805	2,841
3歳	3,008	3,466	4,058	2,996	3,731	3,937	2,939	2,872	2,454	2,170	1,886
4歳以上	2,036	2,383	2,644	1,925	2,021	2,387	2,076	1,766	1,700	1,448	1,355
計	16,259	21,652	22,882	24,466	25,842	20,717	18,441	14,459	10,926	9,589	7,782
年齢別漁獲量(トン)											
年	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014
1歳	111	164	160	204	192	127	134	81	55	44	34
2歳	332	446	477	546	614	470	392	335	234	220	164
3歳	347	399	467	345	430	454	339	331	283	250	217
4歳以上	442	515	569	413	424	504	449	378	368	312	292
計	1,231	1,524	1,674	1,509	1,659	1,555	1,314	1,126	940	826	708
年齢別漁獲係数											
年	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014
1歳	0.19	0.28	0.24	0.29	0.34	0.26	0.31	0.24	0.19	0.18	0.14
2歳	0.42	0.53	0.62	0.61	0.68	0.67	0.59	0.60	0.49	0.54	0.45
3歳	0.51	0.60	0.74	0.59	0.63	0.72	0.68	0.67	0.68	0.66	0.70
4歳以上	0.51	0.60	0.74	0.59	0.63	0.72	0.68	0.67	0.68	0.66	0.70
単純平均	0.41	0.50	0.58	0.52	0.57	0.59	0.57	0.55	0.51	0.51	0.50
年齢別資源尾数(千尾)											
年	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014
1歳	38,215	39,733	44,608	48,308	39,321	33,036	29,604	22,349	18,707	15,920	15,401
2歳	19,899	22,332	21,204	24,765	25,557	19,739	18,018	15,276	12,367	10,889	9,400
3歳	8,942	9,205	9,266	8,030	9,529	9,114	7,089	7,013	5,902	5,324	4,480
4歳以上	6,050	6,331	6,038	5,159	5,163	5,525	5,008	4,314	4,089	3,553	3,219
計	73,106	77,601	81,116	86,261	79,570	67,414	59,718	48,951	41,065	35,686	32,499
年齢別資源量(トン)											
年	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014
1歳	772	803	901	976	794	667	598	451	378	322	311
2歳	1,152	1,293	1,228	1,434	1,480	1,143	1,043	884	716	630	544
3歳	1,030	1,060	1,067	925	1,098	1,050	817	808	680	613	516
4歳以上	1,313	1,369	1,300	1,108	1,084	1,167	1,082	924	886	765	694
計	4,268	4,525	4,496	4,443	4,456	4,027	3,540	3,068	2,659	2,331	2,065
年齢別親魚量(トン)											
年	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014
1歳	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
2歳	461	517	491	574	592	457	417	354	286	252	218
3歳	1,030	1,060	1,067	925	1,098	1,050	817	808	680	613	516
4歳以上	1,313	1,369	1,300	1,108	1,084	1,167	1,082	924	886	765	694
計	2,804	2,946	2,858	2,606	2,774	2,674	2,316	2,086	1,852	1,631	1,428

補足表 2-1. (続き)

年齢別漁獲尾数(千尾)										
年	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024
1歳	2,059	1,211	1,136	1,440	966	524	345	549	307	171
2歳	3,391	2,294	2,152	2,407	2,208	1,648	1,063	1,100	944	611
3歳	1,750	1,471	1,329	1,480	1,478	1,225	873	779	754	572
4歳以上	1,116	963	844	987	980	853	619	554	564	518
計	8,316	5,939	5,462	6,313	5,632	4,250	2,901	2,982	2,570	1,871

年齢別漁獲量(トン)										
年	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024
1歳	42	24	23	29	20	11	7	11	6	3
2歳	196	133	125	139	128	95	62	64	55	35
3歳	202	169	153	170	170	141	101	90	87	66
4歳以上	241	207	184	214	215	188	137	124	127	119
計	681	534	485	553	532	435	306	289	275	224

年齢別漁獲係数										
年	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024
1歳	0.19	0.12	0.11	0.16	0.14	0.09	0.06	0.10	0.07	0.06
2歳	0.56	0.41	0.39	0.45	0.48	0.43	0.30	0.30	0.29	0.22
3歳	0.68	0.62	0.55	0.63	0.69	0.68	0.53	0.45	0.42	0.35
4歳以上	0.68	0.62	0.55	0.63	0.69	0.68	0.53	0.45	0.42	0.35
単純平均	0.53	0.44	0.40	0.47	0.50	0.47	0.35	0.33	0.30	0.24

年齢別資源尾数(千尾)										
年	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024
1歳	13,895	12,641	12,520	11,431	9,063	7,557	7,530	6,944	5,536	3,718
2歳	9,427	8,063	7,891	7,869	6,847	5,576	4,885	5,017	4,432	3,644
3歳	4,239	3,796	3,756	3,754	3,525	2,971	2,546	2,550	2,612	2,331
4歳以上	2,704	2,486	2,384	2,503	2,339	2,069	1,806	1,814	1,956	2,113
計	30,264	26,987	26,552	25,557	21,774	18,172	16,768	16,325	14,537	11,805

年齢別資源量(トン)										
年	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024
1歳	281	255	253	231	183	153	152	140	112	75
2歳	546	467	457	456	396	323	283	290	257	211
3歳	488	437	433	432	406	342	293	294	301	268
4歳以上	584	534	520	544	512	455	400	406	440	487
計	1,899	1,693	1,662	1,663	1,498	1,273	1,128	1,130	1,109	1,042

年齢別親魚量(トン)										
年	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024
1歳	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
2歳	218	187	183	182	159	129	113	116	103	84
3歳	488	437	433	432	406	342	293	294	301	268
4歳以上	584	534	520	544	512	455	400	406	440	487
計	1,290	1,158	1,135	1,158	1,077	926	806	816	843	840

補足資料3 管理基準値案と禁漁水準案等

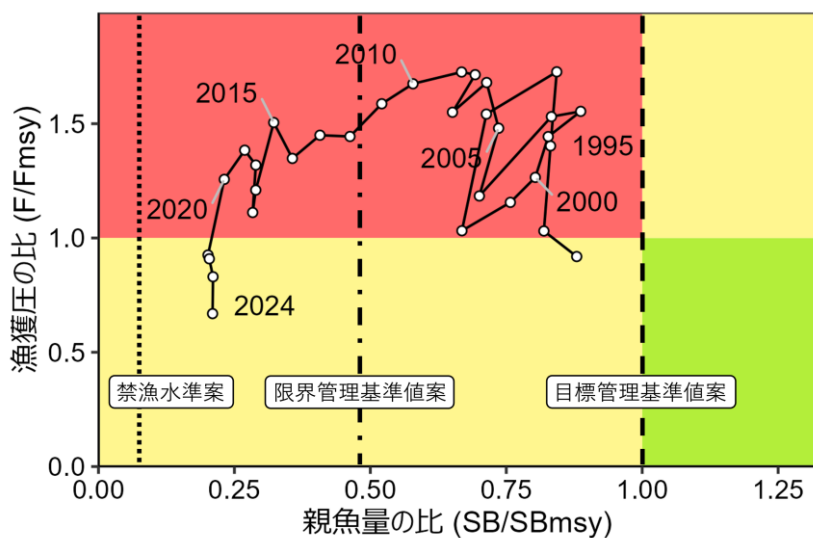
令和3年10月に開催された「管理基準値等に関する研究機関会議」により、目標管理基準値 (SBtarget) には MSY 水準における親魚量 (SBmsy : 40 百トン)、限界管理基準値 (SBlimit) には MSY の 60% が得られる親魚量 (SB0.6msy : 19 百トン)、禁漁水準 (SBban) には MSY の 10% が得られる親魚量 (SB0.1msy : 3 百トン) を用いることが提案されている (八木ほか 2021、補足表 6-2)。

目標管理基準値案と、SBmsy を維持する漁獲圧 (Fmsy) を基準にした神戸プロットを補足図 3-1 に示す。VPA により推定された 2024 年の親魚量 (SB2024 : 8 百トン) は目標管理基準値案と限界管理基準値案を下回るが、禁漁水準案は上回る。本系群における 2021 年以降の漁獲圧は SBmsy を維持する漁獲圧を下回っていたと判断される (補足図 3-1、補足表 6-3)。

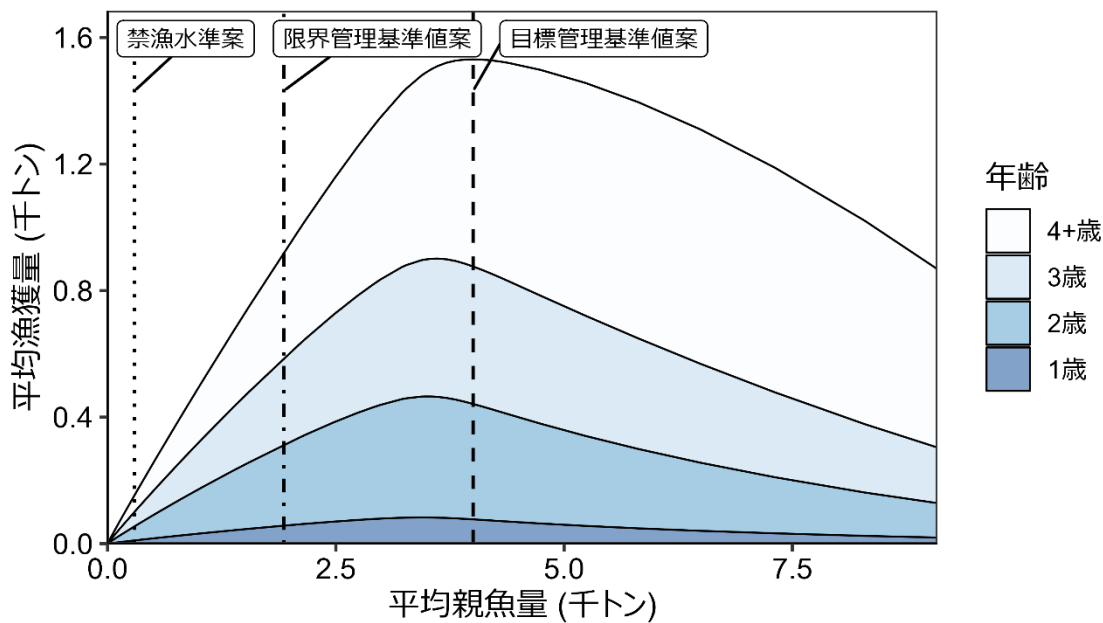
平衡状態における平均親魚量と年齢別平均漁獲量との関係を補足図 3-2 に示す。親魚量が SBlimit 以下では 1~3 歳魚が多くを占めるが、親魚量が増加するにつれて高齢魚の比率が高くなる傾向がみられ、SBmsy 達成時においては 3 歳以上の漁獲が主体となると推測された。

引用文献

八木佑太・藤原邦浩・飯田真也・佐久間啓・吉川 茜・白川北斗 (2021) 令和 3 (2021) 年度ムシガレイ日本海南西部系群の管理基準値等に関する研究機関会議資料. 水産研究・教育機構. 1-22. FRA-SA2021-BRP12-2.
http://www.fra.affrc.go.jp/shigen_hyoka/SCmeeting/2019-1/20211026/doc_mushigarei_japansea-sw_RIM.pdf



補足図 3-1. 管理基準値案と親魚量・漁獲圧との関係 (神戸プロット)



補足図 3-2. 平衡状態における平均親魚量と年齢別平均漁獲量との関係 (漁獲量曲線)

補足資料 4 漁獲管理規則案に対応した将来予測

(1) 将来予測の設定

資源評価で推定した 2024 年の資源量から、コホート解析の前進法を用いて 2025～2053 年までの将来予測計算を行った（補足資料 5）。将来予測における加入量は、各年の親魚量から予測される値を再生産関係式から与えた。加入量の不確実性として、対数正規分布に従う誤差を仮定し、1,000 回の繰り返し計算を行った。2025 年の漁獲量は、予測される資源量と現状の漁獲圧（F2022-2024）から仮定し、生物パラメータ（平均体重等）は管理基準値案を算出した時と同じ条件とした。2026 年以降の漁獲圧には、各年に予測される親魚量をもとに下記の漁獲管理規則案で定められる漁獲圧を用いた。

(2) 漁獲管理規則案

漁獲管理規則案は、目標管理基準値案以上に親魚量を維持・回復する達成確率を勘案して、親魚量に対応した漁獲圧（F）等を定めたものである。「漁獲管理規則および ABC 算定のための基本指針」では、親魚量が限界管理基準値案を下回った場合には禁漁水準案まで直線的に漁獲圧を削減するとともに、親魚量が限界管理基準値以上にある場合には F_{msy} に調整係数 β を乗じた値を漁獲圧の上限とするものを提示している。補足図 4-1 に本系群の「管理基準値等に関する研究機関会議」により提案された漁獲管理規則を示す。ここでは例として調整係数 β を 0.8 とした場合を示した。なお、研究機関会議提案では「親魚量が限界管理基準値を下回るリスクは低いが、本資源は資源評価対象期間が短く再生産関係等に不確実性が懸念されるため、 β は標準値である 0.8 以下にすることが望ましい。」とされている。

(3) 2026 年の予測値

漁獲管理規則に基づき試算された 2026 年の平均漁獲量は、 β を 0.8 とした場合には 53 トン、 β を 1.0 とした場合は 66 トンであった（補足表 6-4）。2026 年に予測される親魚量は、いずれの繰り返し計算でも限界管理基準値を下回り、おおよそ 7 百トンと見込まれた（補足表 4-2a。この親魚量は限界管理基準値未満であるため、2026 年の漁獲圧は親魚量に応じた係数を乗じて $\gamma(SB_t) \times \beta F_{msy}$ として求めた。ここで 2026 年の $\gamma(SB_t)$ は「漁獲管理規則および ABC 算定のための基本指針」における 1 系資源の管理規則に基づき、下式により 0.27 と計算された。

$$\gamma(SB_t) = \frac{SB_t - SB_{ban}}{SB_{limit} - SB_{ban}}$$

(4) 2027 年以降の予測

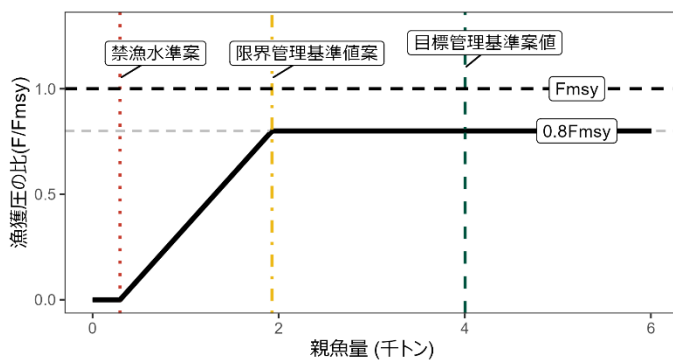
2027 年以降も含めた将来予測の結果を補足図 4-2 および補足表 4-1、4-2 に示す。

漁獲管理規則案に基づく管理を 10 年間継続した場合、2036 年の親魚量の予測値は β を 0.8 とした場合には 27 百トン（90%予測区間は 19 百～38 百トン）であり、 β を 1.0 とした場合には 21 百トン（90%予測区間は 16 百～28 百トン）である（補足表 6-5）。予測値が目標管理基準値案を上回る確率は β が 0.5 以下で 50%を上回る。限界管理基準値

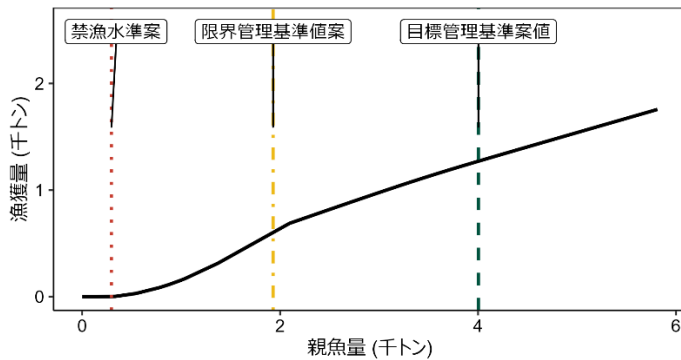
案を上回る確率はいずれの β においても 50% を上回る。現状の漁獲圧 (F2022-2024) を継続した場合の 2036 年の親魚量の予測値は 14 百トン (90% 予測区間は 8 百~23 百トン) であり、目標管理基準値案を上回る確率は 0%、限界管理基準値案を上回る確率は 14% である。

漁獲管理規則案に基づく管理を継続した場合、親魚量が目標管理基準値案を 50% 以上の確率で上回る年は、 β を 0.8 とした場合には 2046 年以降となると予測された (補足表 6-5)。また、限界管理基準値案を 50% 以上の確率で上回る年は、 β を 0.8 とした場合には 2034 年と予測された。仮に漁獲圧をゼロにした場合でも ($\beta=0$)、親魚量が限界管理基準値案を 50% 以上の確率で上回るのは 2031 年になると予測された。

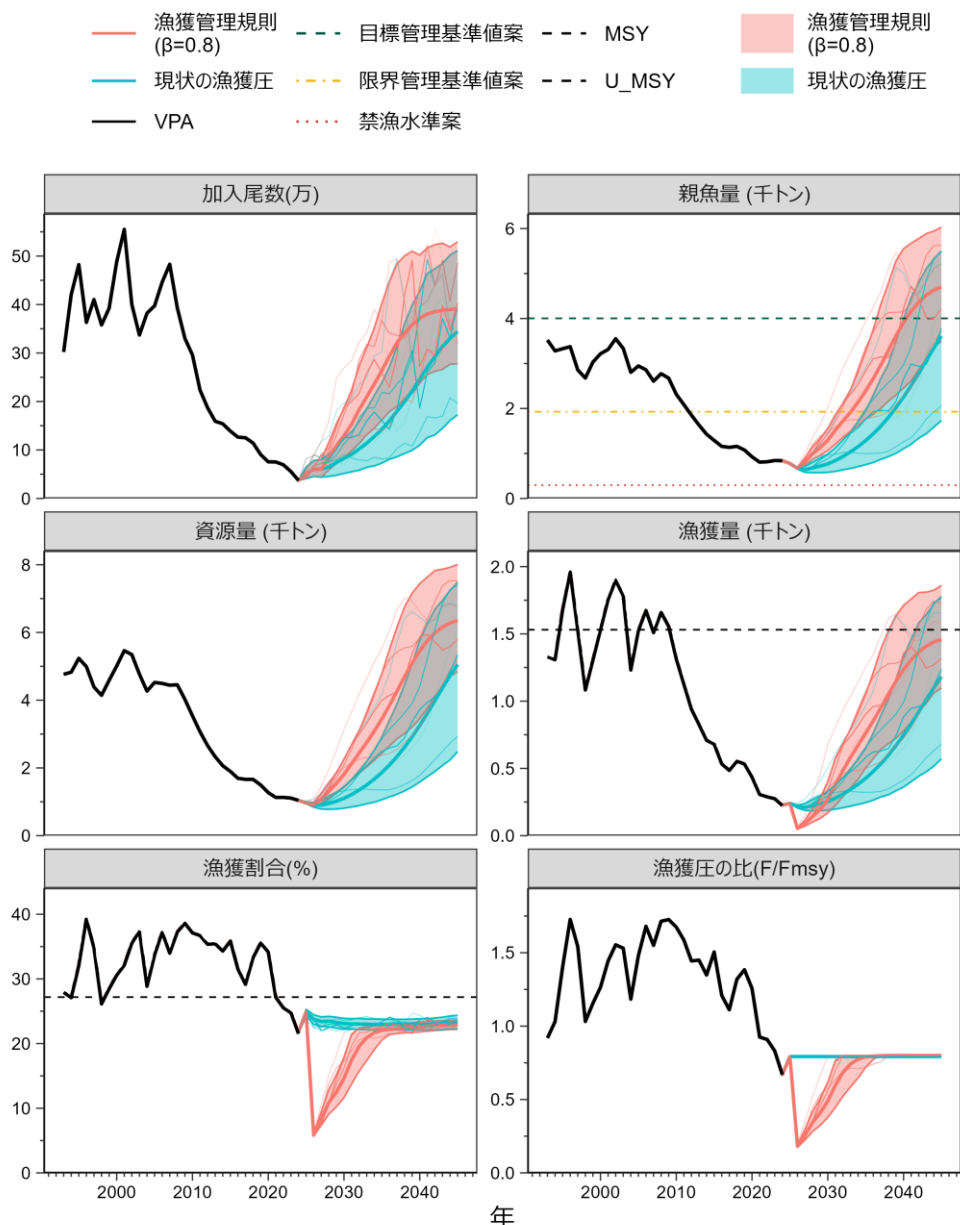
a) 縦軸を漁獲圧にした場合



b) 縦軸を漁獲量にした場合



補足図 4-1. 漁獲管理規則案 目標管理基準値 (SBtarget) 案は HS 型再生産関係に基づき算出した SBmsy である。限界管理基準値案 (SBlimit) および禁漁水準案 (SBban) には、それぞれ標準値を用いている。調整係数 β には標準値である 0.8 を用いた。黒破線は Fmsy、灰色破線は 0.8Fmsy、黒太線は HCR、赤点線は禁漁水準案、黄一点鎖線は限界管理基準値案、緑破線は目標管理基準値案を示す。a) は縦軸を漁獲圧にした場合、b) は縦軸を漁獲量で表した場合である。b) については、漁獲する年の年齢組成によって漁獲量は若干異なるが、ここでは平衡状態における平均的な年齢組成の場合の漁獲量を示した。



補足図 4-2. 漁獲管理規則案に従って漁獲を続けた場合（赤線）と現状の漁獲圧（F2022-2024）で漁獲を続けた場合の将来予測（青色）

太実線は平均値、網掛けはシミュレーション結果の90%が含まれる90%予測区間、細線は3通りの将来予測の例示である。親魚量の図の緑破線は目標管理基準値案、黄一点鎖線は限界管理基準値案、赤点線は禁漁水準案を示す。漁獲量の図の黒破線は最大持続生産量MSYを、漁獲割合の図の黒破線は目標管理基準値案を維持する漁獲割合の水準(Umsy)を示す。漁獲管理規則案での調整係数βには0.8を用いた。2026年以降の漁獲は漁獲管理規則案（補足図4-1）に従うものとした。

補足表 4-1. 将来の親魚量が目標・限界管理基準値案を上回る確率

a) 目標管理基準値案を上回る確率 (%)

β	2025	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033	2034	2035	2036		
1.0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
0.9			0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
0.8			0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	
0.7			0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	10
0.6			0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	8	27
0.5			0	0	0	0	0	0	0	0	1	6	25	51
0.4			0	0	0	0	0	0	0	0	2	18	48	76
0.3			0	0	0	0	0	0	0	1	7	37	72	91
0.2			0	0	0	0	0	0	0	2	20	60	89	98
0.1			0	0	0	0	0	0	0	5	41	81	97	100
0.0			0	0	0	0	0	0	0	15	63	94	100	100
現状の漁獲圧			0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

b) 限界管理基準値案を上回る確率 (%)

β	2025	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033	2034	2035	2036		
1.0	0	0	0	0	0	0	1	3	14	34	51	67		
0.9			0	0	0	0	2	9	28	51	71	83		
0.8			0	0	0	0	3	18	45	68	86	93		
0.7			0	0	0	0	7	32	64	84	94	98		
0.6			0	0	0	0	13	50	79	93	98	100		
0.5			0	0	0	2	24	65	90	98	100	100		
0.4			0	0	0	3	38	81	97	100	100	100		
0.3			0	0	0	6	53	91	99	100	100	100		
0.2			0	0	0	13	71	97	100	100	100	100		
0.1			0	0	0	25	83	99	100	100	100	100		
0.0			0	0	1	38	92	100	100	100	100	100		
現状の漁獲圧			0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	5	14

β を 0~1.0 で変更した場合の将来予測の結果を示す。2025 年の漁獲量は現状の漁獲圧 (F2022-2024) から予測される 2.4 百トンとし、2026 年から漁獲管理規則案による漁獲とした。比較のため現状の漁獲圧 (F2022-2024、 $\beta=0.79$ に相当) で漁獲を続けた場合の結果も示した。

補足表 4-2. 将来の親魚量および漁獲量の平均値の推移

a) 親魚量の平均値の推移 (百トン)

β	2025	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033	2034	2035	2036
1.0	7.8	7.0	8.1	9.6	10.7	12.1	14.0	15.5	16.9	18.4	19.8	21.2
0.9			8.2	9.8	11.0	12.5	14.5	16.3	18.0	19.7	21.6	23.6
0.8			8.2	10.0	11.3	13.0	15.2	17.2	19.2	21.4	23.9	26.6
0.7			8.3	10.2	11.6	13.5	15.9	18.3	20.7	23.5	26.8	30.5
0.6			8.4	10.4	12.0	14.0	16.7	19.5	22.4	26.1	30.5	35.4
0.5			8.5	10.6	12.3	14.6	17.6	20.9	24.6	29.3	35.0	41.4
0.4			8.5	10.8	12.7	15.2	18.7	22.6	27.3	33.3	40.5	48.5
0.3			8.6	11.0	13.2	15.9	19.9	24.7	30.5	38.0	47.1	56.7
0.2			8.7	11.2	13.6	16.7	21.3	27.1	34.4	43.8	55.0	66.2
0.1			8.8	11.4	14.1	17.6	23.0	30.0	39.0	50.6	64.1	77.0
0.0			8.8	11.7	14.6	18.7	24.9	33.4	44.4	58.7	74.8	89.4
現状の漁獲圧			6.4	6.8	7.2	7.7	8.4	9.3	10.4	11.5	12.9	14.4

b) 漁獲量の平均値の推移 (百トン)

β	2025	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033	2034	2035	2036
1.0	2.4	0.7	1.1	1.6	2.1	2.9	3.9	4.9	5.8	6.7	7.4	8.1
0.9		0.6	1.0	1.5	2.1	2.8	3.8	4.9	5.8	6.7	7.6	8.3
0.8		0.5	0.9	1.4	2.0	2.7	3.8	4.9	5.8	6.7	7.6	8.5
0.7		0.5	0.8	1.3	1.8	2.6	3.7	4.8	5.7	6.6	7.6	8.7
0.6		0.4	0.7	1.2	1.7	2.4	3.5	4.6	5.5	6.4	7.5	8.7
0.5		0.3	0.6	1.0	1.5	2.2	3.3	4.2	5.1	6.1	7.3	8.6
0.4		0.3	0.5	0.9	1.3	2.0	2.9	3.8	4.6	5.6	6.8	8.1
0.3		0.2	0.4	0.7	1.1	1.7	2.4	3.2	3.9	4.9	6.0	7.1
0.2		0.1	0.3	0.5	0.8	1.2	1.8	2.4	3.0	3.8	4.7	5.6
0.1		0.1	0.1	0.3	0.4	0.7	1.0	1.3	1.7	2.2	2.8	3.3
0.0		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
現状の漁獲圧		2.2	2.1	2.2	2.4	2.5	2.8	3.1	3.4	3.8	4.3	4.8

β を 0~1.0 で変更した場合の将来予測の結果を示す。2025 年の漁獲量は現状の漁獲圧 (F2022-2024) から予測される 2.4 百トンとし、2026 年から漁獲管理規則案による漁獲とした。比較のため現状の漁獲圧 (F2022-2024、 $\beta=0.79$ に相当) で漁獲を続けた場合の結果も示した。

補足資料 5 将来予測の方法

将来予測は、「令和 7 (2025) 年度漁獲管理規則および ABC 算定のための基本指針 (FRA-SA2025-ABCWG02-02)」水産研究・教育機構 (2025a) の 1 系資源の管理規則に従い、令和 3 年 10 月に開催された「管理基準値等に関する研究機関会議」において最大持続生産量 MSY を実現する F (Fmsy) の推定に用いた再生産関係 (八木ほか 2021) と、補足表 5-1 に示した各種設定 (自然死亡係数、成熟率、年齢別平均体重、現状の漁獲圧) を使用して実施した。資源尾数や漁獲量の予測計算には、「令和 7 (2025) 年度 再生産関係の推定・管理基準値計算・将来予測シミュレーションに関する技術ノート (FRA-SA2025-ABCWG02-04)」水産研究・教育機構 (2025b) に基づき、統計ソフトウェア R (version 4.3.1) および計算パッケージ frasyr (コミット番号: 4bc6b86) を用いた。

将来予測における 2~3 歳魚の資源尾数は以下の式で求めた。

$$N_{a,y} = N_{a-1,y-1} \exp(-M_{a-1} - F_{a-1,y-1}) \quad (a = 2, 3) \quad (1)$$

4 歳魚以上のプラスグループの資源尾数は以下の式で求めた。

$$N_{4+,y} = N_{3,y-1} \exp(-M_{3,y-1} - F_{3,y-1}) + N_{4+,y-1} \exp(-M_{4+,y-1} - F_{4+,y-1}) \quad (2)$$

また、各年齢の漁獲尾数は以下の式で求めた。

$$C_{a,y} = N_{a,y} \left(1 - \exp(-F_{a,y})\right) \exp\left(-\frac{M_a}{2}\right) \quad (3)$$

将来予測における資源量および漁獲量は、ここで求めた資源尾数または漁獲尾数に補足表 5-1 の平均体重を乗じて求め、親魚量はこの資源量に成熟割合を乗じて算出した。

引用文献

水産研究・教育機構 (2025a) 令和 7 (2025) 年度 漁獲管理規則および ABC 算定のための基本指針. FRA-SA2025-ABCWG02-02, 水産研究・教育機構, 横浜, 11 pp.

https://abchan.fra.go.jp/references_list/FRA-SA2025-ABCWG02-02.pdf

水産研究・教育機構 (2025b) 令和 7 (2025) 年度 再生産関係の推定・管理基準値計算・将来予測シミュレーションに関する技術ノート. FRA-SA2025-ABCWG02-04, 水産研究・教育機構, 横浜, 14 pp. https://abchan.fra.go.jp/references_list/FRA-SA2025-ABCWG02-04.pdf

八木佑太・藤原邦浩・飯田真也・佐久間啓・吉川 茜・白川北斗 (2021) 令和 3 (2021) 年度ムシガレイ日本海南西部系群の管理基準値等に関する研究機関会議資料. 水産研究・教育機構. 1-22. FRA-SA2021-BRP12-2.

https://www.fra.affrc.go.jp/shigen_hyoka/SCmeeting/2019-1/20211026/doc_mushigarei_japansea-sw_RIM.pdf

補足表 5-1. 将来予測のパラメータ

年齢	選択率 (注 1)	Fmsy (注 2)	F2022-2024 (注 3)	平均 体重 (g)	自然 死亡 係数	成熟 割合
1 歳	0.27	0.12	0.06	20	0.35	0
2 歳	0.79	0.36	0.22	58	0.35	0.4
3 歳	1.00	0.46	0.35	115	0.35	1.0
4 歳以上	1.00	0.46	0.35	226	0.35	1.0

注 1：令和 3 年度研究機関会議で MSY を実現する水準の推定の際に使用した選択率（すなわち、令和 2 年度資源評価での $F_{current}$ の選択率）。

注 2：令和 3 年度研究機関会議で推定された Fmsy（すなわち、令和 2 年度資源評価での $F_{current}$ に $F_{msy}/F_{current}$ を掛けたもの）。

注 3：本系群では 2022～2024 年の F の平均値を現状の漁獲圧としており、この F 値を 2025 年の漁獲量の仮定に使用した。

補足資料 6 各種パラメータと評価結果の概要

補足表 6-1. 再生産関係式のパラメータ

再生産関係式	最適化法	自己相関	a	b	S.D.	ρ
ホッカー・スティック型	最小二乗法	有	12.419	3,147	0.137	0.675

a と b は各再生産関係式の推定パラメータ、S.D.は加入量の標準偏差、 ρ は自己相関係数である。

補足表 6-2. 管理基準値案と MSY

項目	値	説明
SBtarget 案	40 百トン	目標管理基準値案。最大持続生産量 MSY を実現する親魚量 (SBmsy)
SBlimit 案	19 百トン	限界管理基準値案。MSY の 60%の漁獲量が得られる親魚量 (SB0.6msy)
SBban 案	3 百トン	禁漁水準案。MSY の 10%の漁獲量が得られる親魚量 (SB0.1msy)
Fmsy	SBmsy を実現する漁獲圧 (1 歳, 2 歳, 3 歳, 4 歳以上) = (0.12, 0.36, 0.46, 0.46)	
%SPR (Fmsy)	31%	Fmsy に対応する %SPR
MSY	15 百トン	最大持続生産量

補足表 6-3. 最新年の親魚量と漁獲圧

項目	値	説明
SB2024	8 百トン	2024 年の親魚量
F2023	2024 年の漁獲圧（漁獲係数 F）（1 歳, 2 歳, 3 歳, 4 歳以上） = (0.06, 0.22, 0.35, 0.35)	
U2024	22%	2024 年の漁獲割合
%SPR (F2024)	42%	2024 年の%SPR
%SPR (F2022-2024)	37%	現状（2022～2024 年）の漁獲圧に対応する%SPR*
管理基準値案との比較		
SB2024/ SBmsy (SBtarget 案)	0.21	最大持続生産量を実現する親魚量（目標管理基準値案）に対する 2024 年の親魚量の比
F2024/ Fmsy	0.67	SBmsy を維持する漁獲圧に対する 2024 年の漁獲圧の比*
親魚量の水準	MSY を実現する水準を下回る（0.21 倍）	
漁獲圧の水準	SBmsy を維持する水準を下回る（0.67 倍）	
親魚量の動向	横ばい	

* 2022～2024 年の F の平均値を 2025 年の漁獲量の仮定に使用した。

補足表 6-4. 予測漁獲量と予測親魚量

2026年の親魚量（予測平均値）：7百トン			
項目	2026年の 漁獲量 予測平均値 （トン）	現状の漁獲圧に 対する比 （F/F2022-2024）	2026年の 漁獲割合（%）
管理基準値等に関する研究機関会議資料で提案された β （標準値）			
$\beta=0.8$	53	0.18	6
上記と異なる β を使用した場合			
$\beta=1.0$	66	0.23	7
$\beta=0.6$	40	0.14	4
$\beta=0.4$	27	0.09	3
$\beta=0.2$	14	0.05	2
$\beta=0.0$	0	0.00	0
F2022-2024	215	1.00	24

補足表 6-5. 異なる β を用いた将来予測結果

考慮している不確実性：加入量					
項目	2036年の親魚量 予測平均値 （百トン）	90% 予測区間 （百トン）	2036年に親魚量が以下の 管理基準値案を上回る確率（%）		
			SBtarget 案	SBlimit 案	SBban 案
管理基準値等に関する研究機関会議資料で提案された β （標準値）					
$\beta=0.8$	27	19-38	4	93	100
上記と異なる β を使用した場合					
$\beta=1.0$	21	16-28	0	67	100
$\beta=0.6$	34	23-51	27	100	100
$\beta=0.4$	45	31-68	76	100	100
$\beta=0.2$	61	44-89	98	100	100
$\beta=0.0$	82	63-116	100	100	100
F2022-2024	14	8-23	0	14	100

補足表 6-5. (続き)

考慮している不確実性：加入量			
	親魚量が管理基準値案を 50%以上の確率で上回る年		
	SBtarget 案	SBlimit 案	SBban 案
管理基準値等に関する研究機関会議資料で提案された β (最高値)			
$\beta=0.8$	2046 年	2034 年	2024 年
上記と異なる β を使用した場合			
$\beta=1.0$	2056 年以降	2035 年	2024 年
$\beta=0.6$	2046 年	2033 年	2024 年
$\beta=0.4$	2036 年	2032 年	2024 年
$\beta=0.2$	2034 年	2031 年	2024 年
$\beta=0.0$	2033 年	2031 年	2024 年
F2022-2024	2056 年	2046 年	2024 年

補足資料 7 調査結果の概要

山口県水産研究センターでは、対馬東方海域において漁業調査船かいせいにより幅 4.5 m の桁網を用いた新規加入量調査を実施している。調査海域におけるムシガレイ（全長 10 cm 未満および 10 cm 以上に区分）の出現状況と調査年の関係を調べるため、6～8 月に実施した調査結果をもとに CPUE-LogNormal モデル（庄野 2004）を構築した。ゼロキャッチに対応するため、微小値（0.1）を加えたムシガレイの採集尾数を曳網距離で除し、その自然対数を目的変数とした。調査年、調査月、水深、水温を説明変数とし、それら 4 変数の交互作用を含むフルモデルを構築した。説明変数の有無を変えて Akaike's Information Criterion による総当たりモデル選択を行った結果、全長 10 cm 未満では調査年と調査月および水深を含むモデル、全長 10 cm 以上では調査年と水深および水温を含むモデルがベストモデルとして選ばれた。CPUE の年トレンドを抽出するため、ベストモデルにおける調査年効果の最小二乗平均（Grafen and Hails 2002）を求めた。当歳魚主体とみられる全長 10 cm 未満の CPUE 最小二乗平均は調査期間内において増減を繰り返しており（補足図 7-1）、2021 年以降は概ね横ばいで推移していた。全長 10 cm 以上の CPUE 最小二乗平均は 2017 年に高い値となり、2018 年から 2020 年まで横ばい、2022 年にわずかに増加した後、最新年まで概ね横ばいで推移していた。

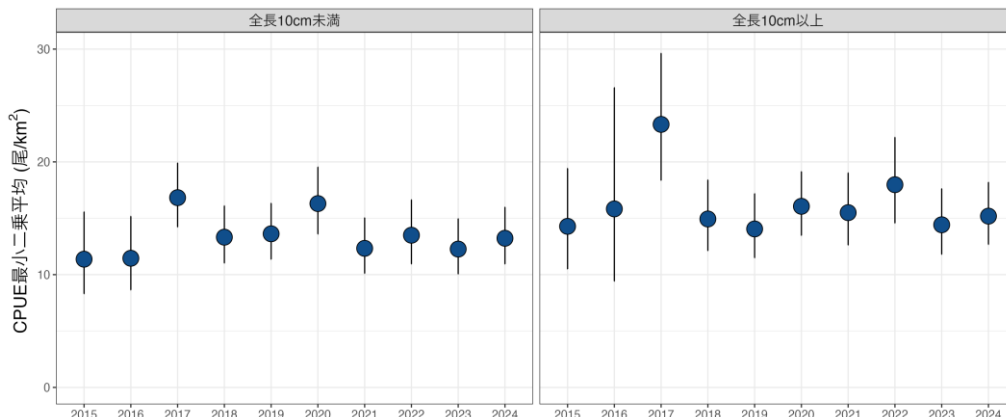
鳥取県栽培漁業センターでは、沿岸性異体類の当歳魚分布量の把握を目的として、例年 4～9 月にビーム長 5 m のビームトロールを用いた漁船用船調査を実施している。本調査におけるムシガレイ当歳魚の主な出現時期および水深帯である 5～7 月の水深 120 m における分布密度を補足図 7-2 に示す。当歳魚の分布密度（千尾/km²）は、2013 年以降 6 月もしくは 7 月に比較的高い値を示したが、2017 年はいずれの月も低い値であった。2018 年の分布密度は 6 月に 66 と突出して高い値を示した。2020 年の 5 月には採集されず、6 月と 7 月については過去の平均値とほぼ同等の値であった。直近 3 年間の傾向は、2022 年についてはいずれの月も極めて低い分布密度であり、2023 年は 6 月と 7 月に低い分布密度ながらも採集され、2024 年は 2022・2023 年と比較するといずれの月でも多く採集された。

注) 昨年度まで山口県が実施した調査結果は評価年度に実施した調査の数値を更新して示していたが、今年度からは漁獲量データや他県の調査結果と足並みを揃えるために評価年度の前年の調査結果を最新値とした結果を示すこととした。

引用文献

Grafen, A., R. Hails (2002) Modern statistics for the life sciences. Oxford University Press, Oxford, 345 pp.

庄野 宏 (2004) CPUE 標準化に用いられる統計学的アプローチ. 水産海洋研究, **68**, 106-120.



補足図 7-1. 山口県対馬東方海域におけるムシガレイの CPUE-LogNormal モデルの CPUE 最小二乗平均の推移。モデルの構造は本文参照のこと。黒線は 95%信頼区間を示す。例年 6～8 月に実施された調査結果を用いて CPUE を計算しているが、2016 年のみ 6～8 月の調査がなかったため 10 月と 12 月に実施した調査結果を用いている。



補足図 7-2. 鳥取県中部沖におけるムシガレイ当歳魚の分布密度の月別推移
2022 年の 7 月は欠測。

補足資料 8 2 そうびき沖底の漁獲成績報告書を用いた資源量指標値の算出方法

2 そうびき沖底の漁獲成績報告書では、月別漁区（10分柁目）別の漁獲量と網数が集計されている。これらより、月 i 漁区 j における CPUE (U) は次式で表される。

$$U_{i,j} = \frac{C_{i,j}}{X_{i,j}}$$

上式で C は漁獲量を、X は努力量（網数）をそれぞれ示す。

集計単位（月または小海区）における資源量指数 (P) は CPUE の合計として次式で表される。

$$P = \sum_{i=1}^I \sum_{j=1}^J U_{i,j}$$

集計単位における有効漁獲努力量 (X') と漁獲量 (C)、資源量指数 (P) の関係は次式のように表される。

$$P = \frac{CJ}{X'} \quad \text{すなわち} \quad X' = \frac{CJ}{P}$$

上式で J は有漁漁区数である。

広がりのある漁場内では魚群の密度は濃淡があるのが通常であり、魚群密度が高いところに漁船が集中して操業した場合、総漁獲量を総網数で割った CPUE は高い方に偏る。そこで漁場を 10 分柁目の漁区に細分し、漁区内での密度は一樣と仮定して、魚群や努力量の偏りを補正し、資源量を指数化したのが資源量指数である。

2 そうびき沖底のように有漁漁区数が減少した場合、漁船の漁区の選択性が資源量指数に影響を与える。底びき網は複数の魚種を対象とし、魚種によって分布密度が高い場所が異なるため、有漁漁区数の減少は漁獲の主対象となる魚種の分布密度が高い漁区に操業が集中することが考えられる。このような場合、資源量指数は密度が低い漁区のデータが無いのでその分だけ過小となる。

補足資料 9 標準化 CPUE の計算方法

1993～2024 年における 2 そうびき沖底の漁獲成績報告書に基づき、緯度経度 10 分漁区解像度の日別・漁船別漁獲量と網数をデータとして用いた。海洋環境データとしては、ETOPO1 global relief model (<https://www.ngdc.noaa.gov/mgg/global/global.html>) から水深を切り出して用いた。今回使用したデータはゼロキャッチ（操業しているが漁獲量は 0）を含む連続値のため、標準化モデルには delta-GLM (Lo et al. 1992) を用いた。このモデルは、有漁となる確率を予測するモデル（有漁確率モデル）と有漁時の CPUE（自然対数値）を予測するモデル（有漁 CPUE モデル）の 2 つを別々に解析するものであり、それぞれのモデルの誤差分布には二項分布と正規分布を設定した。各モデルにおいて最も複雑な候補モデル（フルモデル）の説明変数には、年、季節、海区、水深、漁船 ID の固定効果（すべてカテゴリカル変数）と、年と海区の交互作用を設定した。海区は、2 そうびき沖底における漁場の変遷、ムシガレイの CPUE 分布などを考慮し、東経 130 度の東西で 2 つに分割した。各モデルにおいて、説明変数の有無を変えて、赤池情報量規準 (AIC) による総当たりのモデル選択を行った結果、以下のフルモデルがベストモデルに選ばれた。ベストモデルにおいて、有漁か否かの判別性能は十分であり、有漁 CPUE の残差の正規性・等分散性にも問題がないことが確認されたため、これらのモデルを用いて標準化 CPUE を計算した(補足図 9-1)。

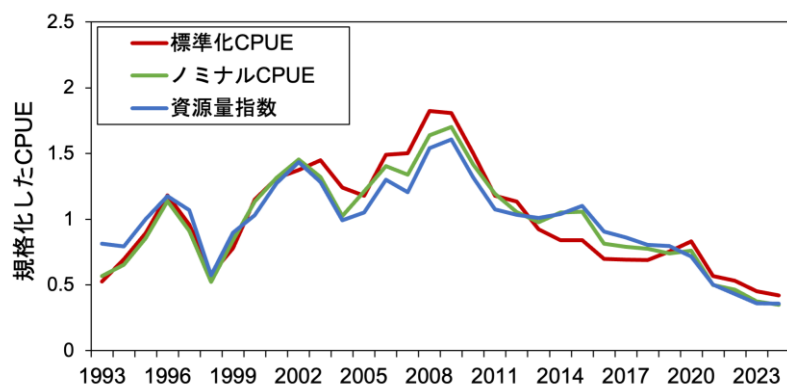
有漁確率モデル：有漁確率～切片+年+季節+海区+水深+漁船 ID+年:海区

有漁 CPUE モデル： $\ln(\text{CPUE})$ ～切片+年+季節+海区+水深+漁船 ID+年:海区

なお、モデル構築、標準化 CPUE の予測およびモデル診断の詳細を別途説明文書 (FRA-SA2025-SC03-0901) に示す。

引用文献

Lo, N. C. H., L. D. Jacobson and J. L. Squire (1992) Indices of relative abundance from fish spotter data based on Delta-lognormal models. *Can. J. Fish. Aquat. Sci.*, **49**, 2515-2526.



補足図 9-1. 標準化 CPUE、ノミナル CPUE、資源量指数の推移

補足資料 10 代替漁業管理規則（上限下限ルール）の検討

令和7年度の資源評価に基づくMSYを目標とした漁獲管理規則案では、10年後の親魚量の予測値が目標管理基準値案（40百トン）を上回る確率が $\beta=0.8$ で4%、 $\beta=0.5$ 以下で50%を上回った。 $\beta=0.5$ の場合、管理期間10年間の最低漁獲量が0.3百トンとなり現状の漁獲量2.4百トン（2024年）と比較して大幅に減少してしまう。そこで、前年の漁獲量に対する変動幅に制限を設けた代替漁獲管理規則（上限下限ルール）を検討した。なお、代替漁獲管理規則に関するガイドラインはFRA-SA2025-ABCWG02-06にまとめられている。

C_t をt年の漁獲量、Lを下制限係数、Uを上制限係数として、 C_t の制限は前年の漁獲量 C_{t-1} に制限係数を掛ける形で次のように表される。

$$C_{t-1} \times L \leq C_t \leq C_{t-1} \times U$$

C_t の制限期間は2026年から10年間（10y）を設定し、それ以降は通常の漁獲管理規則に従う管理を検討した。漁獲量の変動幅については、 $\beta=0.5$ における前年比 $\pm 10\sim 50\%$ 以内（CV10~50: $U=1.1\sim 1.5$, $L=0.9\sim 0.5$ ）を設定し、代替漁獲管理規則に関するガイドラインに従い10年後の親魚量の予測値が目標管理基準値案を上回る確率が50%以上となる変動幅を探索した。

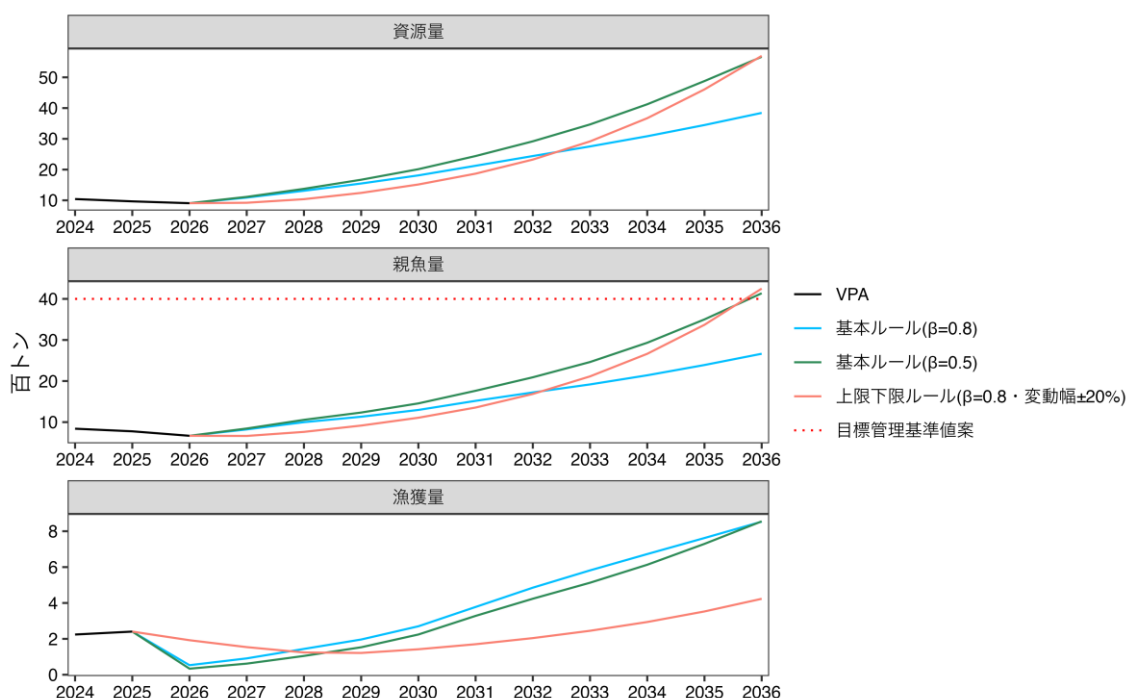
変動幅 $\pm 10\sim 50\%$ 以内の設定では、変動幅 $\pm 20\%$ のみにおいて10年後の平均親魚量が目標管理基準値案を上回る確率は50%を上回った。変動幅 $\pm 20\%$ の上限下限ルールの将来予測の結果および比較対象として基本ルールの $\beta=0.8$ と0.5の将来予測の結果を補足図10-1に示した。また、管理開始当初（2026年）、管理中盤（2027~2030年）、および管理終盤（2031~2035年）の漁獲量の期間中の平均値を比較した（補足表10-1）。この先10年間の将来予測の結果を補足表10-2および10-3に示した。変動幅 $\pm 20\%$ の上限下限ルールを適用した場合、管理1年目の平均漁獲量は基本ルールを $\beta=0.8$ および0.5で適用した場合より多く、管理中盤では $\beta=0.8$ より少なく、 $\beta=0.5$ と同程度となり、管理終盤では $\beta=0.8$ および0.5より少なくなった。資源が望ましくない状態に陥るリスクの指標として、管理規則が導入された10年間で1度でも限界管理基準値案、禁漁水準案を下回る確率を比較したところ、親魚量は現状ではすでに限界管理基準値を下回っている状態であるが、禁漁水準を下回る確率はいずれも0%であった。

管理期間10年間で予測される漁獲量の変動の指標として、平均年変動（AAV: annual average variation）、平均減少率（ADR: average depletion ratio）、最大減少率（MDR: maximum depletion ratio）、最低漁獲量（MinC: minimum catch）を比較したところ、AAVは基本ルールでは $\beta=0.8$ で0.36、 $\beta=0.5$ で0.42であるのに対し、変動幅 $\pm 20\%$ の上限下限ルールでは0.19と抑えられた。ADRは変動幅 $\pm 20\%$ の上限下限ルールでは-0.19であった。また、MDRは基本ルールでは0.00であるのに対し、変動幅 $\pm 20\%$ の上限下限ルールでは-0.20であった。さらに、MinCは基本ルールで0.3~0.5百トンであるのに対し、変動幅 $\pm 20\%$ の上限下限ルールでは1.2百トンと多くなった。

将来予測の結果から、変動幅±20%の上限下限ルールを適用した場合でも10年後の資源量や親魚量が基本ルールを0.5で適用した場合と同程度の水準まで増加することが示された（補足図10-1）。

引用文献

水産研究・教育機構 (2025) 令和7(2025)年度 代替漁獲管理規則を提案する際のガイドライン. FRA-SA2025-ABCWG02-06. 水産研究・教育機構, 4 pp.
https://abchan.fra.go.jp/references_list/FRA-SA2025-ABCWG02-06.pdf



補足図 10-1. 変動幅を±20%で10年間固定した場合の将来予測結果

$\beta=0.8$ の代替漁獲管理規則（上限下限ルール・変動幅±20%以内）に加えて、比較対象として $\beta=0.8$ と 0.5 の基本的漁獲管理規則（基本ルール）の3パターンの推移を示した。

補足表10-1. 代替漁獲管理規則(上限下限ルール)のパフォーマンス評価

漁獲管理 方策案	β	予測平均漁獲量(百トン)			予測平均親魚量(百トン)		管理目標	リスク(10年間に1度でも起きる確率)			管理期間10年間(2026~2035年)で予測される 漁獲量の変動				
		1年目	2~5年目 平均	6~10年目 平均	5年後	10年後		10年後に 目標管理 基準値案 を上回る 確率	親魚量が 限界管理 基準値案 を下回る	親魚量が 禁漁水準 案を下回る	漁獲量が 半減する	平均年変動 AAV※	平均減少率 ADR※	最大減少率 MDR※	最低漁獲量 (百トン) MinC※
		2026年	2027~ 2030年	2031~ 2035年	2031年	2036年									
基本ルール	0.8	0.5	1.8	5.8	1.5	2.7	4%	100%	0%	0%	0.36	-0.02	0.00	0.5	
基本ルール	0.5	0.3	1.4	5.2	1.8	4.1	51%	100%	0%	0%	0.42	-	0.00	0.3	
上限下限ルール ($\pm 20\%$)	0.8	1.9	1.4	2.5	1.4	4.3	50%	100%	0%	0%	0.19	-0.19	-0.20	1.2	

※AAV(annual average variation)は漁獲量の増減を考慮した変動の大きさを表す指標・ADR(average depletion ratio)とMDR(maximum depletion ratio)は前年と比べて漁獲量が減少した場合のみに注目した指標であり、管理期間中に漁獲量が減少した場合、その減少率の平均をとったものがADR、最大値を取ったものがMDRである。MinC(minimum catch)はシミュレーションの中で観測された最低漁獲量である。

補足表 10-2. 基本的漁獲管理規則案（基本ルール）および上限下限ルール（ $\beta=0.8 \cdot \pm 20\%$ ）を適用した場合における将来の親魚量が目標・限界管理基準値案を上回る確率

a) 目標管理基準値案を上回る確率（%）

漁業管理規則案	β	2025	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033	2034	2035	2036	
基本ルール	0.8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	
基本ルール	0.5			0	0	0	0	0	0	0	1	6	25	51
上限下限ルール （ $\pm 20\%$ ）	0.8			0	0	0	0	0	0	0	1	6	25	50

b) 限界管理基準値案を上回る確率（%）

漁業管理規則案	β	2025	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033	2034	2035	2036
基本ルール	0.8	0	0	0	0	0	0	3	18	45	68	86	93
基本ルール	0.5			0	0	0	2	24	65	90	98	100	100
上限下限ルール （ $\pm 20\%$ ）	0.8			0	0	0	0	4	24	58	84	94	98

補足表 10-3. 基本的漁獲管理規則案（基本ルール）および上限下限ルール（ $\beta=0.5 \cdot \pm 30\%$ ）を適用した場合における将来の親魚量および漁獲量の平均値の推移

a) 親魚量の平均値の推移（百トン）

漁業管理規則案	β	2025	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033	2034	2035	2036
基本ルール	0.8	7.8	7.0	8.2	10.0	11.3	13.0	15.2	17.2	19.2	21.4	23.9	26.6
基本ルール	0.5			8.5	10.6	12.3	14.6	17.6	20.9	24.6	29.3	35.0	41.4
上限下限ルール （ $\pm 20\%$ ）	0.8			6.6	7.6	9.2	11.1	13.6	16.9	21.1	26.6	33.7	42.5

b) 漁獲量の平均値の推移（百トン）

漁業管理規則案	β	2025	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033	2034	2035	2036
基本ルール	0.8	2.4	0.5	0.9	1.4	2.0	2.7	3.8	4.9	5.8	6.7	7.6	8.5
基本ルール	0.5		0.3	0.6	1.0	1.5	2.2	3.3	4.2	5.1	6.1	7.3	8.6
上限下限ルール （ $\pm 20\%$ ）	0.8		1.9	1.5	1.2	1.2	1.4	1.7	2.0	2.4	2.9	3.5	4.2